
伊達「IS学園？」 一夏「仮面ライダー？」

キャプテン・うまーベラス

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

伊達「IS学園？」 一夏「仮面ライダー？」

【Nコード】

N3278V

【作者名】

キャプテン・うまいベラス

【あらすじ】

三学期も間近のIS学園、そこに流れ着いた二人組はなんとアノ男たちだった！

このSSはSS速報VIPさんにも投稿しています

投稿したものをすこし編集したものをこちらに投稿する形になります、あしからずご了承ください

筋肉と眼鏡と鏡の部屋（前書き）

インフィニット・ストラトス（以下IS）と仮面ライダー000（以下000）のコラボレーションSSです。

どっちかというと、000というよりバースとのコラボです。

というよりほとんどバースしか出ません。

時間軸はISは七巻よりも後、000は今のTVシリーズのすこし後、オリジナル設定で伊達さんとドクターが“相打ちになって消滅した”つまり表舞台から姿を消した世界になります。

温かく見守って下さい。

筋肉と眼鏡と鏡の部屋

オズの世界

星の顔出す隙間もないほど夜空に敷き詰められた暗雲、そして降りやまぬ雨

まるで銃弾のように雨が降り注ぐ廃工場の一角、伊達明はそこに横たえてた

（もう…、喋る力も絞り出せねえ、火野と後藤ちゃんはすっかりやっつたのか…？）

~~~~~（数十分前）~~~~~

グリードとの最終決戦に向かっていた仮面ライダーオズこと火野映司、そして手術を終え、絶対安静の伊達に変わりバースの力を引き継いだ後藤慎太郎。

敵の最終計画を阻止するためにグリードの本拠地を目指していた。

この廃工場を抜けるともう目と鼻の先だ。

そんな2人の前に立ちはだかる男が一人、恐竜メダルを取り込み紫のグリードへと覚醒を遂げた天才科学者・真木清人

真木は2人を始末すべく怪人体へと変貌し、2人に襲いかかる

だが、足元に放たれた光弾によりその行動は阻まれることになる

そこにいた男は、なんと怪我を押しつけて駆けつけた伊達だった！バスターに弾を込めながらその男は“吠えるッ！”

「火野、後藤ちゃん、ここは俺に任せて先に行けッ！」

「伊達さん、まだ戦える体じゃ無いでしょう」

「お前たちは俺の目標の一億のために命懸けで力を貸してくれたっしょ、今度は俺が力になる番だって！」

「また君ですか…」

やれやれ、といった風に目線を伊達の方に向ける真木

「世界はもうじき終末を迎えます、邪魔はさせませんよ」

「ドクター！てめえのくだらない欲望、ここでとめてやるぜ」

(…ッ！まさか、伊達さんはここで…)

伊達の真意を察したのか、後藤は唇をかみしめ叫ぶ

「火野、早く行くぞ！もう時間がない」

「でもッそれじゃ伊達さんが！」

「いいから！じゃあ伊達さん、後お願いします」

「応よ！」

「それと…、お世話になりましたッ」ペコリ

「火野、行くぞ」ダッ

「は、はい…」ダッ

(後藤ちゃん、火野、この世界を…頼んだぜ)

「感動のお別れはもうおしまいですか」

「ああ、悪いな 時間取らせちまって、それじゃ…、戦いますか」  
ジャキン

「決着をつけましょうか」ゴゴゴ

日も暮れてしまった廃工場の一角、こうして二人の長くも短く辛い戦いが始まる

熱くなる2人の闘志と裏腹に、場には冷やかな風が吹き抜け雨が容赦なく降りつける

審判も傍観者もない暗く悲しいゲーム、そして誰も知らない戦いが終わりを迎える

---

結果は相討ち、ダメージの癒え切らぬ伊達とメダルを取り込んだ副作用のツケがまわった真木は最後の1撃を撃ち合った後

お互いに地面に伏した。

(ドクター、もうくたばっちまったか?) チラリ

もう碌に動かす事も出来ない首を傾け横たわっている真木に目をやる伊達

(悪いな、先に逝かせちまうなんて)

(けど、安心しな。地獄への片道旅行、つきあってやるぜ)

(あ、頭ん中が…、真っ白になってきやがっ、た)

(死にそうな目なんて…、何度も見て来たが…、やっぱり嫌なもんだな) ガクッ

こうして伊達明の短くも壮絶な人生は幕を閉じた、  
はずだった  
は

「どうなってんだコリヤ…」

伊達明は“そこ”にいた、一面銀色の鏡のようなオーロラのような壁に囲まれた世界

…コッ…コッ…コッ…

辺りをキョロキョロと見回している伊達は、自分の方に向かってくる足音を聞く

「誰がいるかと思えば、君でしたか…」

「ドクター、会いたかったぜ！」

思わず真木に飛びかかる伊達、そのはずみで真木の肩に乗った人形通称“キヨちゃん”が落つこちそうになる

真木はそれを奇声を発しながら慌てて拾い上げ、呟く

「YAMERO！ とにかく、ここが死後の世界であるというのは、些か考えにくいですねえ」

「だったら、俺達まだ生きてるってことだよな、儲けもんだ」へーイ  
ハイテンションでハイタッチを迫る伊達を真木はさらりと受け流し、  
問いかける

「何故、私と生きていた事を喜ぼうとするのですか？、私たちは敵  
同士だったはず」

そう、伊達と真木は敵同士、つい先ほどまで殺し合いを演じ会って  
いた柄である

その敵である伊達が自分たちの生存の喜びを分かち合おうとするの  
が真木には理解ができなかった

「確かにドクターがやったことは許させることじゃねえ。けどさ、  
だからって勝手に死んでいい命なんてあっていいわけ無えじゃん、  
だろ？」

そして伊達は照れ臭そうに付け加える

「それにさ、俺達、結構いい凸凹コンビだったしな あんな終わり方なんて納得できねえよ」

「私はそうは思えませんが…」

「ったくも〜、素直じゃねえんだから」グリグリ

「Y A I M E I R O」

相変わらずの掛け合いを広げる2人、その2人のもとにもう一人男がやってくる

茶色の外套を纏い同色のチューリップハットをかぶった黒ぶち眼鏡の男、仮面ライダーをよく知っている者ならきつと一目で名前を思い出すであろう、“あの男”である。

その男が、真木と真木にコブラツイストをかけている伊達の背後に近づく

「伊達明、そして真木清人だな、よく来てくれた」

「ん、あんた誰？もしかしてこここの近くの人？だったらこのオーロラみたいなから出れるようにしてくんない？気持ち悪くて触る気にもなんねえんだ」ヒョイ

「ッハア！ 伊達君、君という男は…」ヨロッ

「紹介が遅くなってしまったね、私は預言者“鳴滝” 実は訳あつ

て君たちをここへ連れてきたんだ」

## 筋肉と眼鏡と鏡の部屋（後書き）

とうとう始めてしまった作者初の投稿小説です、とりあえず次回からはキャラクターや世界観などをゆっくり解説していきたいと思えます。

感想や質問ありましたらどうぞよろしくお願いします

それでは次回をお楽しみに！

**使命と添い寝と昼下がり（前書き）**

同日投稿2段目です

伊達さんとドクター真木の前に現れた男とは…？

そしてとうとうHSの世界へ…

## 使命と添い寝と昼下がり

突如現れた謎の男鳴滝の口から発せられた言葉で伊達と真木は混乱していた

「連れてきた？ 戦いの傷とかも無くなってんだけど、どういうことだ？」

「君たちには“とある世界”を救ってきてほしいんだ」

「おい、ガン無視で話進めてやがるぜ」ヒソヒソ

「いい加減、こちらの要求に答えてほしいですねえ」ヒソヒソ

伊達と真木は、体育座りで並んで1人で勝手に話を進める鳴滝に遠い目を向けていた

そして（勝手に）一通り喋り終えた鳴滝は2人に問いかける

「何か質問はあるかい？」

「ハイ」キョシュ

「はい真木君」

「私達がもと居た世界はどうなったのですか？」

「君たちの世界は、火野映司と後藤慎太郎の活躍によって平和を取り戻したよ」

「グリード達を倒したってのか？」

「そうだ、グリードは1人残らずメダルに還元されていった、ああ、君は別だったね、真木清人」ニヤリ

鳴滝は皮肉を含んだを笑みを真木に向け、話を続ける

「後藤慎太郎は警視庁に戻っていったそうだ、そして火野映司、彼はコアメダルを再び封印する為の旅に出た。消息はそれっきりだ」

「（そうか、よかったな、後藤ちゃん）じゃあ俺からも質問！」キヨシユ

「はい伊達君」

「俺たちがその世界を救うって事をしたら、もとの世界に帰れるのか？」

「帰りたいのかね？」

「そういう訳じゃねえけど、そこはやっぱ気になんじゃん？」

「それもそうだな、厳密には君たちは一度死んだ身だ、それを私がよみがえらせたのだが、その答えは…そうだな、君たちの活躍次第によっては…だね」

「何だそりゃ？」

「もういいだろう、それじゃ健闘を祈っているよ」パチン

そういつて指を鳴らす鳴滝、すると銀色の壁が迫ってきた

「ちょ、もう行くのかよ」「アセッ

「何をすればいいかも聞かされていないのですが」

「大丈夫だ、君たちには適したロール（役割）とアイテムを用意してある」「ドヤッ

「まあしゃあねえか、こうなりゃハラ括ろうぜ、ドクター」

「そうするしかないようですね…」

目を覆うほどの眩い光とともに伊達達の姿が消える、そして辺りを覆っていた銀色の壁も消える、ここはどこかのマンションの一室だったようだ

「行ったか、これでようやく録画していたプリキュアの観賞会を始められ…」ガッ

部屋が暗かったのが原因か、それとも鳴滝が浮かれていたのが原因か、タンスの角に足をぶつけた

「痛痛ツツアア　　、おのれデイケイドオオ　　」

---

ここは“インフィニット・ストラトスの世界” IS学園

正月が明け、明後日にはもう冬休みが終わり三学期が始まってしま  
う、そんな昼下がりに

「今日もいい天気だなあ〜っと」ノビ

「一夏！何をしているんだ？そんなところで」

「箒か、昼飯も済んだしちょっと腹ごなしに散歩しようかと思って  
な」

「そ、そうか、私はてっきりまた他の女と逢引でもしているのかと  
……」ゴニョゴニョ

「何言ってるんだ？よかったら一緒に行くか？」

「う、うむ ついて行ってやろう、たまにはゆっくり体を動かすの  
もいだろう／＼／＼」ピト

「っておい、なんでひつついてくるんだよ」

「察しろ、馬鹿者／＼／」

「ああ、年明けで昼下がりにはいえまだ寒いもんな…って、イテテ、  
足を踏むな」

「はあ、貴様という男は…」

中庭を通り抜け職員用駐車場にさしかかる

(いつもは上の階から見下ろしてはっかだったけど、こうして見ると植木とかなかなか凝った造りしてるな…)

「見てみる一夏、あの生垣、凄くきれいだ」

「ああ、そうだな…、ん？」

「どうした？一夏」

「いや、普段は見慣れない車が停まっているな、と思って」

「む、確かに、出入りの業者には見えないな」

(確かに、教材や機材を運ぶ業者はあんな小さな車には乗ってこないしな)

「お、おい一夏、どこに行くんだ？」

「いや、なぐんか気になるんだよな、あの車」スタスタ

「どうせ何もないだろう、って、一度言い出すと聞かないんだから、私も行くぞ」

2人は車に向かって歩を進める、その車の名はフォルクスワーゲン  
ビートル ドイツが誇る世界一生産された車である

「まあ、筈の言つとおり、何も無いんだろっけど…ナッ」

「どうした？車内に何か…イッ」

2人は車内を覗いた途端言葉を失ってしまった、はたして車内にいたものとは！

（（い、いい年こいたおっさん2人が、シート倒して寄り添って寝てる…））

・・・

IS学園の職員用駐車場、伊達と真木はここへ流された、この車も今の服装もこの世界に来るにあたって用意されたロール（役割）とアイテムの一つである

そして、この世界で目を覚ます…、寄り添ったままの体勢で…

「ううーん、ッ！」

「んああ…、ッ！」

お互い同じタイミングで目を覚まし、視線が合う…

「……………」  
「ドキドキ

車外にいる一夏と篤も固唾をのんで見守っている

「ウワァア

「

悲鳴を上げ、お互いにビートルから転げ出る伊達と真木

「何気持ち悪い事やってんだよ、ドクター！！！」

「…それはこっちの台詞ですよ、伊達君！私にあのような趣味はありません」

子供のように言い争いを広げる2人に見兼ねた一夏が声をかける

「あ、あのー…?」

「何!?!」

「あ、いえ何でも無いデス…」

その様子を黙って見ていた幕の横に1人の女性がやってくる

「篠ノ之、なんの騒ぎだ?あの奇妙な2人組はなんだ?」

「織斑先生、何かよく分からないんですけど、その車の中にある2人が寝てて、起きたと思ったら喧嘩しだして…」

「そうか、わかった、もういい」

千冬は口論している伊達と真木に近づき、息を吸って張りのある声で問いかける

「おい、そこのあやしい2人組、ここは基本関係者しか立ち入り出来ないはずだ、何者だ、そして何をしに来た」

千冬の問いかけに2人は声を揃え、静かに答えた

「この世界を救いに来ました!」

「は?」

ひとつの世界に流れ着いた、違う世界の男が二人

まだまだ苦難は多くなりそうだ

## 使命と添い寝と昼下がり（後書き）

今回は両世界の時間軸についての説明です、先に述べたとおりISは七巻が終わった後、オーズは勝手にテレビシリーズが終わった後の世界です

ISの一巻から話を始めようとも考えたのですが、それだと他のキアラのおいしい所を総取りするだけの原作なぞりになってしまいうだけなので、止めにしました

次回もがんばります!!

**教師と不確かな男達とひざまくら（前書き）**

カザリ…、あっけない最後だったな…

まさかドクターがあんなエゲツナイ真似をするなんて…

カザリは最初からやなやつでしたけどあんな最後はやはり同情せざるを得ませんね

それはそうと第三話、始まります

## 教師と不確かな男達とひざまくら

伊達と真木はそろって職員用駐車場で千冬と押し問答を繰り広げていた

尤も喋っているのは伊達の方で真木は積極的に会話に参加しようとしていない

「一度しか聞かないぞ、お前たちは何者だ？そして、ここへ何をしに来たんだ？」

「だから世界を救いに来ただって！って言ってる方も恥ずかしくなるけど」

「生憎だが、どこの馬の骨とも知れん輩の妄言に貸す耳は無いな」

「だからあ！茶色の変なオッサンに飛ばされたんだって…、ってドクターも何とか言っつてよ！」

押し問答を繰り広げる伊達と千冬、伊達は真木に助け舟を求めるが同じ経緯でこの世界に来た真木に効果的な説明ができるはずがなかった

「と言われましても、私にもどう答えてよいものかと、とりあえず君は身に起きた変化に気が付くべきでしょう」

「ん？おおっ！」

伊達はここで改めて自分の姿を見て驚いた、自分がいつも着ていた

ジャケットではなく、丈の長い白衣をいつもの上半身を腰に結んだつなぎの上に着ていた

日頃ムチャをする伊達の性格もあって、その姿は医者としての清潔さよりもかつて世界を巡つての医療をしていた頃の自身の姿にそっくりである。まあ自分自身なのだからそうとしか説明のしようがないが。

「なんだこりゃ…？どついつこつた？ そついやドクターは…」

「私は特に変わっていませんよ」

真木の服装は変わらず、静かさを讃える黒のインナーにコート、要するに全身が黒だった

その黒づくめの姿の中に一点、さらに異質さを窺わせている人形が無表情で左肩にチョコンと坐していた

「変わっているといえば…、胸ポケットにこんなものが」ゴソゴソ

「ん、あ、俺もだ！」ゴソゴソ

2人がポケットから手帳のようなものを取り出す、それを見た千冬は驚きで目を見開く

「それは…、IS学園の教員証ッ！まさか偽造じゃないだろうな…」

「教員…？ そ、そつだよ教員なんだよ俺達 なつドクター！（話合わせろ）」

「ええ、そのようですね」

「しかし、こんな急に男の職員など、俄かに信じられん……」

「織斑先生、エ、いったい何の騒ぎですか？　こんなところで」

先ほどの問答を聞きつけ一年一組の副担任、山田真耶が駆けつけてきた

緑の髪と見た目に似合わない豊満な胸が特徴的なやさしい女性である

千冬は事の経緯を真耶に説明する　すると真耶は最初は驚いた様子だったが何かを思い出したかのように

「もしかして朝噂になってた新任の先生が来るって話、この方達の事じゃないんですか？」

「ああ、あの理事長も全く予期できないと言っていたこの時期の赴任の件か、てつきりデマかと思っていたが」

「とりあえず職員室に来てもらいましょうか」

「そうするしかないようだな」

さっきから2人で話し込んでいた千冬と真耶は頭を抱えながらも一つの決案に至ったようである

「すみませ〜んそこのお二人さ〜ん、ちょっと着いてきてもらえませうか」

「あ、呼ばれちゃった…、ドクター、来いってよ」

「はい、ではこれで」

「「あ、はい…」」

軽く会釈をした真木に一夏と箒は声をそろえて歯切れの悪い返事で返す

「織斑、篠ノ之、お前たちはそこで待機だ！」

「えー、理不尽です！」

「つべこべ抜かすな、これは命令だ！」

「「はい」」

「何、データの確認をするだけだ、すぐに済む。手伝ってほしいのはその後だ、待ってる」

「織斑せんせーい、行きますよ」

「わかった、じゃあ行こうか」

こうして四人は校舎へ消えて行った

残された若人2人…

「なあ、箒、とりあえず、どっかに腰かけよっか？」

「そつだな」

「中庭の芝生なんてどうだ？ちょうど日なたであったかいし」

「ん…、一夏がいいなら…どこでもいい…／／／」

「そ、そうか…じゃ、行こうか…／／／」

「い、一夏…、その、手…／／／」スツ

「お、おう…／／／」ギユッ

所変わってIS学園校舎内 情報管理室

「やっぱり、教員として新規登録されていますね」

二人はパソコンのモニターを覗きこんで正規採用教員のページに目を通していた

「しかし、男性教員の採用など今まで試験的に行われていただけで、一気に本採用で二人も入れるなど考えられん」

「でも、この二人、国籍不明、経歴不明、パーソナルデータも殆ど解禁されていません」

「いったい何なんだ？この二人は？」

「あ、大学だけ出てます。真木清人…城南大学工学部卒。伊達明…城南大学医学部卒。…織斑先生、城南大学って聞いた事ありますか？」

「……………」

千冬はしばらく眉を顰めていたが、あきらめた様子で真耶に問いかける

「山田先生、信用できるか？あの二人は」

「ううん、ちょっと怪しいですけど、ここで採用されるといふことはそれなりに実績があるってことじゃないんですか？」

「それもそうか、まあ私一人が学園に逆らったところでどうにかなる話じゃないしな」

納得する千冬、それにうなづく真耶

「連中が何か企んでないかよく注意しておく必要も無きにしもあらずといった所だがな」

一方その頃 中庭 芝生

「千冬姉達、遅いな…／／／」

「あ、ああ、けどそのおかげで、私は一夏と…ゴニョゴニョ…／／／」

「ん？何か言ったか？」

「な、何でも無い」プイツ

「そ、そうか…、ファァー、ポカポカしてきたら眠くなってきた」  
「じっじっ」

「何！だ、だらしない奴だ、しょうがないな、良かったら私の膝で  
…／／／」

「え、声が小さくて聞こえないんだが…」

「ぐ…、だ、だからこうしていればいいと言っているんだ！／／／」  
ガシッ グイッ トサッ

「うおっ、ほ、篝、恥ずかしいって…／／／」

「うるさいっ、私だって恥ずかしいんだ、お互い様だ！…／／／」

「そうか、お互い様か…、じゃあしょうがないな…／／／」

「ああ、お休み、一夏…」 ナデナデ

(篝の膝、やわらかくて気持ちいいな…、それに何かいいにおいす  
るし…)

情報管理室前 廊下

全寮制のこの学校はもうじき学校が始まることもあって、生徒がそ  
れなりに行き来していた

その中で佇んでいる伊達と真木は非常に目立っていた

「なあドクター」

「何でしょう」

「この学校、女の子が多いな」

「そうですねえ、男子生徒は先ほどの織斑君ひとりしか見かけていませんねえ」

（キヤー、アノフタリツテナニモノ？）

（アタラシイセンセイカモ）

（トシウエノオトコノヒトツテステキ）

（デモアノニンギョウナニ？）

「何か影からコソコソ見られてるし…、落ちつかねえなあ」

「君はもう少し忍耐力を身に付けた方がいいのではないですか？」

「うるへー、そんなこと言う奴には、こつだつ」ペシッ ポロツ

「¥@ テ ♯ μ、ハアハア、伊達君、君はなんとということをして…」

（キヤー、ニンギョウノヒトガキョドウフシンニナッタ）

（ハヤクニゲマシヨー）

「お、ドクターが奇声を発したせいで女の子たちが逃げ去った」

ガチャ

「あの〜、ちょっといいですか？」

「おあ、いいですよ、ほら、ドクターも！」

「伊達君、今の件はよく覚えておくといいでしょう」「プルプル

「何かあったんですか？」

「いや、何でもないよ、さ、何するの」

「とりあえず立ち話も何なんで、応接室に案内しますね」

「応！」

「じゃあ、着いてきて下さい」

そんなこんなで簡単な説明と寝泊まりする部屋の解説を終え、再び職員駐車場に戻ってきた2人

「とりあえず、手荷物もって配属先つてのに挨拶に行かなきゃいけねえみたいだな」

「まだ数時間しかたつてないのにいろいな話を聞かされましたね

「おおっと、その前に道案内がいるって聞いたな」

「あの〜」

「「？」」

「さつき千冬姉、いや、織斑先生に言われて残ってた者なんですけど」

「ああ、さつきの少年少女か、もしかしてずっと待ってたのか!？」

「いやあ、まあ、そんなところですよ」

「そうか悪かったな!今度メシおごるわ」

「今度つて…、ていうかあなた方はどういった件でここへ来たのですか?」

「今期からの教員として配属されましてね、宜しくお願いします」

真木の他人行儀な挨拶よりも男性の教員が来るということに一夏と篤は驚いて顔を見合わせる

「とりあえずさ、この配属先つてどこ案内してくんない?」

そういつて教員証に標されていた配属先をみせようとする伊達と真木、するとそこに少女がふたりやってきた

「あゝ、おりむーとしのののさんだゝ、何してるの?」

「本音、ダ、ダメだよ!男の人と何か話してるし…」

「ああ、のほほんさんと簪か、この二人は三学期からこの学園で働く先生…でいいんだっけ?」

「その通り!俺は伊達明、養護教諭なんだって。よろしくっ」「ビ

シッ

「真木清人です。整備の実技と座学を受け持つことになりました」

「私たちも自己紹介をしておいた方がよいのか？一夏」

「そうだな、せっかくだしな！俺、織斑一夏っついていいいます、一年一組です。宜しく願います」

「同じく一組の篠ノ之箒といます。宜しく願います」

「同じく同じく一組の布仏本音っついていいいます、よろしくおねがいしまーす」ブンブンバサバサ

「一年四組の更識簪です…、よ、よろしく願います」

自己紹介も終わり伊達と真木はそろそろ移動しようかというとき

「じゃあ、ちよっ行き先まで道案内してほしいんだけど、いいかな？」

「いいですよ、ええっと、伊達先生が保健室で真木先生が…」

（まさかこんなところまで来て先生なんて呼ばれることになるとは…）

「真木先生が…、新設工学技術開発室…って新開室のことか！？」

“新設工学技術開発室”この言葉を聞いた途端一夏達四人が急に言葉につまる

「俺ここだけはムリだわ、ここ…」

「しッ！」ガバッ

何かを言いそうになった一夏の口を箒が塞ぐ

「とりあえず、真木先生は私たちが連れていくから、伊達先生は織斑君と篠ノ之さんで案内してあげて」

あわててフォローに入る簪、それを眺めていた伊達と真木は首を傾げ“？”となっていた

「ああ、悪いな簪、じゃあ行きましようか伊達先生」

道案内をしてもらうことになり二手に分かれ、それぞれの道に行く

教師と不確かな男達とひざまくら（後書き）

あとがき恒例の解説コーナーです イエイ

今回は記念すべきキャラの解説第一回目ですッ

そのキャラはなんと、

“山田先生”ッ（何故ッ）

山田真耶、IS学園一年一組の副担任、眼鏡で巨乳、あと巨乳（大事なことなので二回ry）この作品では教師側として伊達や真木と絡むことが多いと思います。

IS本編でも千冬のサポートに回っていることが多いので、数少ない教師としての目線で話の展開を見守ることになると思います。

実は千冬 真耶（はサポートという意味で！変な意味じゃないよ！）という関係は伊達 真木という関係で対比にしているのです。日頃から頼れる先輩である千冬をしたう真耶と、無茶の塊である伊達のサポートを渋々こなしながらも未だ真意を明らかにしない真木と対照的な二つのコンビと思って見ていただければ幸いです。

さて、何故第一回目が山田先生なのかというと実はこの作品、もともと山田先生をヒロインに据え置いて考えてた作品だったので

しかし話を進める上でどうしても不都合が生まれ哀れ彼女は脇役に…

ごめんなさい、山田先生

「ひどいでしょう…あ、次回はお二人が職場にあいさつに行くそうです。次回もよろしくお願いします」

缶ジュースと挨拶と見つからないアレ（前書き）

暑いですね、早く冬になってほしい…

そして冬になれば早く夏になればっていうんですよね…  
そんな感じで第四話スタートです。

## 缶ジュースと挨拶と見つからないアレ

「あ、ああ、じゃあドクター、また後で…」

「いえ、今日はもう出歩かない方が良いでしょう、これをお渡ししておきます」

そういつて真木は伊達にカンドロイドのゴリラカンとバッタカンを  
放り投げる

（ ）（ ）（缶ジュース？）（ ）（ ）

「そうか、わかった！とりあえず落ち着いたら連絡入れるわ」

「その選択が良いでしょう」

「んじゃ行こっか、保健室に」

「はい、一夏！行くぞー！」

「あ、ああ、じゃあのほほんさんと簪も、気をつけてな！」

「うん…、織斑君もね」

「おりむー、ばいばい」

こうして俺とドクターは分かれてそれぞれの配属先に挨拶に行くこ  
とになった

(しかし…、養護教諭って何すりゃいいんだ?)

「…先生、伊達先生!」

「おわつ、何だよ!びつくりするなあ」

「あ、すみません…、先生ってこの学園に来るまでは何していたんですか?」

「ああ、世界中を旅していた…ってトコかな?」

「旅…ですか? どういったところを?」

「中東とかヨーロッパとか、とにかく色々だな」

「へえー、夢がありますね」

「夢とかじゃないけどな…、それに楽しい事ばかりじゃないぜ」

「まあ何となくわかりますよ…と、ここですよ、保健室」

「おう、ありがとう」

「中の先生呼んできますね。失礼します」

「簿が中に入りしばらくすると『どうぞ』と、やわらかな女性の声が聞こえてきた」

「伊達が中に入ると中には簿と保険医らしい白衣を着たそこそこ歳を召した養護教諭らしい女性が座っていた」

彼女は人当たりがよい性格で伊達ともすぐに打ち解けた

すこし話をしたところで仕事のマニュアルを取ってくるといって保健室を出て行った

その隙を窺い伊達はさつきから気になっていた事を一夏と暮に問いただした

「なあ、さつきドクターの配属の新…なんとかって言った時、なんで軽くもめてたんだ？」

「あゝ、それですか…」チラリ

「……………」コクリ

「あの配属先、新設工学技術開発室っていうんですけど…」

……………

こうして私は伊達君と別れて二人の女生徒につれられて配属先に挨拶に行くことになった…

「ねえ、まきせんせーはどうしてお人形さんを肩にのせてるの？」

「これは私の大切な人の教えの象徴でして、今日の私を形成する重要なファクターなのです」

「どんな人だったんですか？」

「それは答え兼ねます、それより布仏君と言いましたね、君はなぜ私の腕にひつついているのですか？」

「えへへ、こんな背の高い人に会うの初めてだから、一度やってみたかったんだ」

「ほ、本音！やっぱり迷惑だって、やめなよ」

「いえ、こういう事は初めてなので、どういって良いのかはわかりませんが、今日あったばかりの私にここまで開放的になる方も珍しいな、と思ひまして」

「だって、だてせんせ もまきせんせーも悪い人じゃないって一目でわかるもん」

私が悪い人ではない…ですか、布仏君、それは見当違いというものです

「あ、真木先生、ここです、新設工学技術開発室！ほら、本音、早く離れなさい」

「ここですか、どうもありがとうございます」

道案内は終わったが簪と本音は少し離れた所から見ていただけで立ち去ろうとはしない

不思議に思いながら真木は研究室の入り口の呼び鈴を鳴らす、しかし出てくる気配が一向に無い

「今は留守のようですね、また明日窺う事にしましょうか」

二人は顔を見合わせてなにやら思いつめたような表情をしていた

「あ、あの、真木先生、この研究室なんですけど…、気を付けてくださいね」

「うんうん」

「気をつける…とはどういう意味ですか？」

「この研究室の今の責任者の女性の方なんですけど、ものすごく性格が悪いんです」

「そうそう、二学期からやってきた男の研究員の人たち冬休み前に全員辞めちゃったんだ」

「それはそれは、極端な女尊男卑家というわけですか」

「女尊男卑というより、自尊男女卑って言った方がいいかもしれないんですけど、自分の気に入らない人間には超攻撃的なんです」

「男の人は顔見るだけですぐ大声で悪口言ってた、おりむも一回靴ひもがほどけてるって理由で20分くらい怒られてた」

「何か些細な理由ひとつあれば全然関係ないことまで引っ張り出してこきおろしてくるんです」

「おりむもその一件で目も合わせないようにしているんだって」

「なるほど、まあ、私も相手に第一印象で誤解されるのは慣れてますから、そこはうまくやるしかないでしょう」

しかし、伊達君はうまくやっているのでしょうか

ところかわって、保健室

「ドクター、大丈夫かな？」

「心配ですか？まあそうでしょうね、俺なんかもう二度とあの部屋の前は通らないって決めましたから」

「確かに…、あの時は酷かったな、下の研究員もご機嫌取りで煽ってきたしな」

「俺の味方誰もいなかったもんな」

「う、済まなかったとあの時謝っただろう！」

「いや、そういう意味じゃないけど…」

そうしているうちに先ほど出て行った養護教諭が戻ってきた

「じゃあ、俺達はそろそろ帰ろうか！腹も空いたし」

「そうだな、よし、このまま食堂まで行くぞ」

「セシリア達を誘わなくていいのか？」

「いいんだ！じゃ、失礼しました」ガラッ

「し、失礼しましたー」ピシャ

「おお、ありがとなー！ーじゃ、俺もそろそろ部屋に戻りますわ」

「はい、明日からよろしくお願いしますね」ペコリ

「は、はいこちらこそよろしく申し上げます」ペコリ

明日から…か、ま、やるっきゃねえか

見慣れない地図に四苦八苦しながら寮を歩き部屋の前に着く

「ここが職員寮の個人部屋か…」

伊達はこうして挨拶を終え、これから自分が寝泊まりする部屋の力を開け中へと入る

「広えな〜、ベッドも高そうな奴だし…、ホテルだったら結構な値段とられるんじゃないかねえか…？」

書類と手荷物を壁側の机の上に放り投げ、よく見るとその机には高そうなパソコンや周辺機器が備え付けてあった

(きっと使わないだろうなあ、機械とか苦手だし…)

機械のスペシャリストといえば、一緒にこの世界に来た真木の事がふと頭をよぎる

そっぴや、ドクター大丈夫かな？

真木の配属先の良くない噂を聞き、嫌な予感を感じる

徐に着ていた白衣から預かったバッタカンドロイドのプルタブをプシュツとあける

「ドクター？聞こえてるか？」

.....

『…聞こえているのは当たり前です。何か用ですか？』

割りと普通な声であった、まあ普段から自分がちよっかいを掛ける以外で殆ど表情を変えるところを見たことがないため心境の変化を推し量ることは出来ないが…

「いや、ドクターの仕事先がなんかめんどくさい所って聞いてさ、  
どうかな？って思ってた」

『気にするような事は何もありませんよ、尤も今日は留守のようだったのでまた明日窺う事になりました』

「そうか、んまあ何かあったらいつでも言ってこいよ、それに俺よりドクターの方が立場的に偉そうだな」

『それに関しては否定しませんが、…一つ気になる点がありまして』

「何だよ」

『部屋へ戻る前に一度車に戻って積まれたカンドロイドや持ってき

た道具の確認をしていたのですが……」

「うんうん、それで？」

『やはりバースシステムのバースドライバーのみ入ってませんでした』

「……やっぱりかあ。まあ、前の戦いでも使わなかったからな……」

『車に開けられた形跡はありませんでしたし、おそらくは初めから無かったものかと』

「そついや俺ドクターとバスター一丁で戦ったんだよな……よく相打ちに持ち込めたよな、良く考えたら。ハハハ」

『……………』

「あ、ああ悪かったよ……、それにしても鳴滝のオツサンも氣い利かしてくれりゃあいいのに」

『あるのはセルメダルとバースバスターだけのようですね』

「ベルト作るのってどれくらいかかりそうなんだ？」

『ベルトはバースシステムの全ての軸となってますから、そう簡単にはいかないかと』

「そつか、まあしょうがねえか」

そつだ、しょうがねえんだ。金のためにやるわけじゃねえしな

「俺はもう寝るわ、いろいろ疲れた」

『そうですか、私は調べ物がありますので、』

「ああ、御休み」

こうして伊達と真木の長い初日が終わった

## 缶ジュースと挨拶と見つからないアレ（後書き）

あとがき恒例、解説コーナー（パチパチ）

今回は我らが主人公織斑一夏…その?! いくくんおめでとう

やはりIS学園唯一の男子生徒としての伊達さんとの絡みが期待されます

伊達明という男の背中に彼は何を見るのか？

そんな二人の絡みに腐った趣味を持つ少女達は何を見るのか（笑）  
!?

そんなわけで以上、次回をお楽しみに！

「俺何か短くねえ!?! あ、今回は噂を聞いたアノ人が伊達先生に会いに行くそうです、やめとけばいいのに…!」

## 夢とパンツと生徒会長（前書き）

お久しぶりです、一週間程中国に行ってきました。

いやあ、楽しかったです。

では早速更新していきます。

## 夢とパンツと生徒会長

伊達は無駄に寝心地のいいベッドの中でまどろみに包まれ奇妙な夢を見ていた

一面が白に眩く輝く空間に自分ひとりがポツンと立っている夢

鳴滝に会った時のような一面鏡のような怪しい空間ではなく、どこか温かさを感じさせる優しい光であった

《どこなんだここは？場面がコロコロ変わってややこしくてしょうがねえっての》

どこまで歩いてても、叫んでみても何も変わらない、するとそこにはぼんやりと人影が浮かんできた

《だれなんだ？こっち来て顔見せやがれ》

その人影はもやがかかったようにぼんやりとしか見えないが、顔が細かく動いている、何かを喋っているようだ

《……さ、こ……んて……な………よ》

《何？なんて言ってるのかわかんねえって……》

すると人影は伊達にむけ手を伸ばしてきた、伊達もそれに応じるように手を伸ばす…すると

「ハッ！」ハアハア

伊達は慌てて目を覚まし起き上がり辺りを見回す

「ハアっ、夢か…、この世界に来たことも夢だったら…なんてな…」  
そう、これが今の伊達の現実、よく分からない世界に連れてこられよく分からない学校で教諭になり未だに実態の掴めない使命をこなさないとならない

「まあ、考えたってしょうがねえか、いや、よく考えねえとダメなんだろうけど！」

なんてまるで巻き込まれ体質のラノベの主人公のようなセリフを呟きながら、汗でジトリと重くなったシャツを脱ぎ別のシャツに手をつける、すると

『すいませーん、いませんかー』 コンコン

誰かが自室の戸をノックしてきた

「応、今開けるからちよつと待ってな」

若い女の子の声だったが、生徒だろうか？男性教員は珍しいとかで冷やかしに来たのかもしれない

ガチャ

「はいはい、開けましたよ」

ドアを開けた先にいた人物、水色の外側に跳ねたショートヘアに扇

子を持った少女

「おはようございます、伊達先生。私はこのIS学園の生徒会長、更識楯無と申します。新任の先生が来られると聞いて挨拶に伺いました」

「ああ、とりあえず立ち話も何だし、入りなよ」

「そ、その前に、…ズボンを穿いて下さいますか？伊達先生」

そう、シャツとパンツ一枚で眠っていた伊達はそのままの格好でドアを開けてしまい楯無は少々赤面していた

「おお、悪い悪いすぐ着替えるわ」

伊達はすぐさまいつものツナギを着てその上から白衣を纏う

穿き終ると楯無はベッドに腰かけて待っていた

「ごめんな、変なもの見せちゃって」

「いえ、私も少し早すぎたかなと思っただんですが、何しろ挨拶なんて初めてなもんで」

「そうか、もう一人の方は挨拶にいった？」

「あ、はいさつき、行っただんですけど…」

顔が引きつり言葉に詰まる楯無

「ああ、ドクターね、変わってるでしょ。人形とか、こーんな奴」

変なポーズをとって真木がいつも肩にかけている人形を表現する伊達  
それを聞いていた楯無も急に目を見開いて

「それも変でしたけど！どういう人なんですか？真木先生って！部屋は異常に寒いし壁から紫の布が垂れ下がってるしで」

「ハハハハ！ ああいう人なんだよ。まあ、悪い人じゃないから。悪  
の科学者みたいな顔してるけどね」

「何考えてるか全然分かんないし…、そういえば本音ちゃんも簪ち  
ゃんも電話で言ってたわね。『変な人だった』って」

「だから様子見に来たのか？信用ねえなあ、俺達」

「えっ！？いや、わ、私は別に、挨拶に来ただけで特別なことな  
んて」

「嘘だ」

おどけたままの伊達だがその言葉には一本筋の通った確証があった

「嘘じゃないですよ」

「さっきはじめてだと言ってたじゃないか」

「あっ、そ、それは…、その…」

「男が来るなんて珍しいから？別に怒ってるわけじゃないからさ、正直にいつてごらんよ」

「はああー、急に男の人が来るって聞いたからどんな人たちか確かめに行こうと思ったら、張り切りすぎたのが裏目にでちゃったな」

「そんじょそこらの男どもと一緒にすんじゃねえよ、伊達明は世界で戦ってきた男なんだぜ」

「へえ、面白そうな話ですね。今度また聞かせてくださいよ」

「ああ、またいつかな…。それよりドクターは何してた？」

ベッドに腰掛け立ったままの伊達に向かい合うように座り足をパタパタと振る楯無

「資料室から山のように本を持ってきて部屋で見つて書類書いてた、寝てないって言ってたわ」

「大丈夫かよ…、まあ大丈夫なんだろうけど」

「あ、忘れてた！そのドクターから預かりものがあるんです」

そういつて楯無は一度部屋の外に出て伊達にとって見覚えのある“あるもの”をかついでもってくる

「ふう、重い。とりあえず持ってきてくださいだつて、何が入ってるの？」スツ

床に下ろした“それ”は伊達が戦闘で愛用していたメダルを収容し

ていたミルク缶であった、ごく丁寧に蓋にガムテープで目張りをしてある

楯無は興味津津でミルク缶の蓋に手をのぼすが、伊達はそれを一喝する

「触るなッ！」カッ

「ひうつ、は、はい、ごめんなさい…」

急に怒鳴られ驚きシュンとなる楯無

「わ、悪い、大声出しちまって。けど、これはな…」

伊達はつい反射的に大声をだして楯無を静止させた、それは単純に自身の所有物に触れられたくないからか、あるいは違う世界の人間に自分たちの技術を見せてしまうのに後ろめたさを感じたからだろうか

「すみませんでした！男の人とお話する機会あんまりないからつい浮かれちゃって…」

うつむきながら謝る楯無、表情は窺いしれない

普段人を自分のペースに巻き込む彼女も年上の男が相手ではなかなかうまくいかないうだ

「まあ、これが生徒と教師の境界線つてやつだ。知られちゃ困ることもある。次から気をつけてくれたら何も言わねえよ」

「はい、あ、もうじき特訓の時間だ、じゃあ私はそろそろ失礼します」

「特訓？部活でもやってるのか？」

「いえ、ISですよ、一夏君に稽古つけてあげてるんです」

「そうか、よくわかんねえけど頑張ってたな」

「はい、それじゃ。あ、そうだ、明日の始業式で新任の先生の挨拶をしていただきますから、適当に考えといてくださいね」

「ああ、わかったよ。あ、最後にひとついいかな？」

「何ですか？」

「変なこと聞くけど…、“仮面ライダー”…って知ってるか？」

「仮面ライダー…ですか？」

我ながら変な質問をしたなあと思いつつ伊達は楯無に視線を向ける  
楯無はあっけらかんとした様子でさらりと答えた

「さすがにこの歳じゃ見ませんよ。あ、でも妹が隠れファンだっ  
ていました」

「見る？」こじやテレビで放送してるのか？」

「よくわかんないけど、妹は今放送してる作品のバイクに変身する

赤い仮面ライダーが好きだって言ってました。不死身なのがいいとか…って」

「そうか、そこん所はよくわかんねえけど、とにかくありがと」

「はい、それじゃまた明日！」

「応」

この世界じゃ仮面ライダーはお茶の間のヒーローやってんのか

なんか複雑だな…

しかも俺今変身できないし…

どうなっちまうんだあ！？俺の先行きは…

とりあえず明日の挨拶でも考えますか…

## 夢とパンツと生徒会長（後書き）

毎度おなじみの解説コーナー

今回は舞台設定です、というのも自分の友達にこの投稿作品を見てもらったら

「IS学園は孤島の上に建っているからドクターの車って意味なくね？」

と指摘され急遽舞台設定を考え直しました

“ IS学園には本土と島を結ぶ海底トンネルが在る ” ことにしました

主な使い方

機材運搬や物資の供給、整備用の資材、食堂や購買の食料品などが海底トンネルを通ってきます。

基本的に一般生徒は立ち入りできません。

臨海学校ではモノレールで発着場まで移動してバスに乗りました。

そんな感じですよ。

質問ご意見あればドンドン送ってきてください

では次回もよろしく願います。

## 姉妹とカードキーと初仕事（前書き）

オーズの劇場版見てきました！

面白かったんですけど去年のA t o zに比べると時間の短さのよう  
なものを感じましたね

話やアクションは文句なしだったんですけどなんかTVスペシャル  
を見ている気がしなくもなかったですね

では第六話始まります

## 姉妹とカードキーと初仕事

真木は昨夜会う事が出来なかった新設工学技術開発室、通称“新開室”のスタッフに会うべく研究棟を進んでいた

彼に与えられた役職はこの部署の開発責任者である、話では面倒な連中がいると聞いていた

（さて、今日こそはいるのでしょうか…）

ふと、今朝の自室に押し掛けてきた楯無の事を思い出していた

（不躰な少女でしたが…、かなり深い洞察力を兼ね備えているようでしたね）

基本的に一度見たものは二度と忘れない真木の頭脳はあくまで冷静に今朝の出来事を分析していた

（そしてあの少女は恐らくは他の人間よりも少し深い立ち位置にいる…）

（この世界…、IS…、実に興味深い。調べてみればもうすこし詳しく分か…おや？）

奇妙な人形を左腕に乗せた奇妙な男、真木清人は部署の開発室の前にさしかかった、その開発室の前に一人の少女が佇んでいた、その少女も真木に気がついたようだ

「あ、真木先生…、お早うございます」

「君は…、更識簪君でしたね。お早うございます」

「あの…、フルネームじゃなくて名字で呼んでもらって結構なんですけど…」

「失礼、今朝君のお姉さんが私の部屋に挨拶に来たもので、区別の為に」

「そうなんですか…、あの、お姉ちゃん何か失礼なこと言いませんでしたか？」

何かを思い出したかのように言葉を続ける簪

「お姉ちゃん、かなり恐れを知らない人で…、初対面の人にもあんまり遠慮がないっていうか」

「はあ」

「とにかくすぐ人を自分のペースに引き込んでしまっんです」

「いえ、特にそういった様子は、礼儀正しくて聡明なお姉さんでしたよ」（入ってきてすぐに出て行ったそうな顔をしていたとは言わない方が良いでしょう…）」

「あ、だったら良いんですけど…、えへへ／＼／」

姉を褒められて少し嬉しそうな簪

「では、私はこれで」

そういつて開発室の呼び鈴を鳴らす。が、相変わらず反応がない

「しかたありませんね」

そういうと真木は教員証からIDカードを抜き取ると呼び鈴の横にあるカードリーダーに通す

するとドアが自動で開き真木は中に吸い込まれるように入ってしまった

「大丈夫かな……」

一人残った簪は心配そうに呟くのだった

一方その頃！

伊達は楯無との邂逅後、仕事を教わるために保健室に向かっていた、あのミルク缶を背負って

「しっかし、ベルトがねえってのは心配だなあ。バスターだけじゃ心許ねえっての」

まだ敵の実態も皆目見当のつかないこの世界で“変身”というアドバンテージを無くしている伊達は表には出さないが内心では焦っていた

「ドクターもなるべく早くって言ってたけど、どうなる事やら」

そして保健室の前に着くと襟元を治しカードリーダーにカードを通し中に入る

「お早うございませーす！ おばあちゃん先生」

保健室の主“石下啓呼”いわしたけいこ この道30年の養護教諭で、御年56才の大ベテラン先生である

嫌味を感じさせない態度と母性あふれる度量の広さで悩み多き年頃の少女から、時には指導に行き詰った教師まで、幅広くメンタル面をカバーする学園の母である

おばあちゃん先生というのは数年前IS学園に赴任後、相談に乗ってもらった生徒たちから敬愛と親しみやすさを込めて贈られた愛称であり、

彼女自身も“どんな勲章よりも誇り高い、生徒たちの身近にいれる名”として生徒にそう呼ばせている名前である

伊達に対しても是非そう呼んで欲しいとお願いしていたのだ

「いやあ、今日も寒いですね」

「そうですねえ、明日から新学期ですから。また賑やかになってすぐ温かくなつてきますよ」

「そっか、それもそうっすね」

「ウフフ、伊達先生、素敵なカバンをお持ちですね？」

おばあちゃん先生は伊達のミルク缶を見て微笑みながら問う

「あ、これですか？いや、自分に合うのを探していたらこんな  
しかなくて…」

「伊達先生は体が大きくてたくましい方ですから、よくお似合いで  
すよ」

「はは、そりゃどうも…」

「けどあまり大きな荷物が必要になる仕事はありませんよ？昨日の  
マニュアル読まなかつたんですか？」

「いや、マニュアルはどーも苦手で… ほら、俺って超実践主義  
派ですから！」

こうして伊達は仕事を教えてもらうことになった

IS学園はもともと大学病院並みの設備を整えているため保健室で  
の仕事はそれほど多くはないのだ

主な仕事は薬や備品の在庫確認、薬品や器材の発注確認、部屋の手  
入れ、そして生徒への対応である

伊達が入ったことで二人体制となり、おばあちゃん先生は楽ができ  
ると喜んでいた

一通り説明を終えたおばあちゃん先生は伊達に初めての仕事を与えた

それは、『一人でも多くの生徒に名前を覚えてもらう』という内容  
である

「くったく、おばあちゃん先生も難しい仕事くれるよなあ」

時刻はお昼時を少し回っており、伊達はとりあえず腹ごしらえするために食堂へ向かうことにした

## 姉妹とカードキーと初仕事（後書き）

解説のコーナーです

今回は小道具です

この話の中で使った教員証ですが、話の通りカードキー付きになっております

さらには生徒を含めて管理者権限レベルというのがあり1～5までに分かれています

1は一般生徒に割り振られているレベル、基本的に権限はゼロに等しく何をするにも3以上の管理者の許可が必要（外出許可とか）一夏達はこのレベルに当てはまる  
当然だが一番数が多い

2は部活動の部長等に割り振られているレベル、団体での活動の申請などに使うことが多い  
三番目に数が多い

3は一般的な教師に割り振られているレベル、資料室や一部の立ち入り禁止区域に申請なしで入れる、伊達はこのレベルに当てはまるがイマイチよく分かっていない（尚、楯無は生徒会長でレベル2権限だが家柄もあり非公式でレベル3権限を持っている）  
二番目に数が多い

4は一部のISに携わる教師に割り振られているレベル、地下特別区画への立ち入りを許可されている、無人機襲撃事件の無人機の残

骸等も保管されている、真耶はこのレベルに当てはまる  
四番目に数が多い

5は最高権限とも言われており、学園上層部は全員このレベルである。上層部では無い一介の教師で割り振られているのは千冬と真木の2名、前者の千冬は元世界一のいう経歴からの特例であるが、後者の真木は出身、経歴不明なので十分怪しまれている。その権限は計り知れないものがあるが、上層部は一枚岩ではないため派手に動くのを控えている

こんな感じですが、この設定が活かされるのはもっと後になりそうです。元ネタは原作7巻に出てきた“レベル4”と“地下特別区画”からです

もっと話が進めば詳しく書くようにします

では次回もお楽しみに

## 相談とコーヒーとドクターの天敵（前書き）

最近、自分の中で一度見た映画をまた映画館に見に行くのがマイブームでして、オーズの劇場版ももう一度見てきました。

一度見ただけでは分りきらなかった面白さとかがよく分ります

主題歌も見に来ていた子どもたちも一緒になって歌ってたりして微笑ましかったです

それでは始めて行きます

## 相談とコーヒーとドクターの天敵

昼食のため食券を渡し職員用渡し口で待つ伊達、すこしようすがへんだ

(アホみたいに品数多いのになんでおでんがねえんだ！ 職務怠慢じゃねえのか!?)

伊達はこの学園の事をまだよく分かっていないようだが、IS学園は様々な国の女生徒が集うところであり、食事のことでのトラブルを避ける名目で種類を増やしているのだ

しかし大好物のおでんが無かった伊達はプリプリ怒りながら仕方なくざる蕎麦を猛烈な勢いですすり込むしか無いのだった

そして食べ終わり、食堂をでようとすると聞き覚えのある声で自分の名を呼ばれているのに気がついた

「伊達先生！ お疲れ様です。お昼食べてたんですか？」

その声は昨日いろいろと忙しそうにしていた山田真耶であった

(ああ、昨日の先生か、ヤベツ名前思い出せねえ、たしか…、やま…、やま…)

「ああ、蕎麦食ってきた…、食べてきました。山ちゃん先生はお昼はもうっ？」

「山ちゃん…、あの！私の名前は山田真耶っていうちゃんとした名前

が…って、聞いてますか!？」

「聞こえてるよ、どっちもステキだったことに変わりはないって」  
キリッ

そう言っただけで彼女の目を見つめさらに彼女の肩に自分の手を添える

「そ、そうですか／＼ンもうしょうがないですねえ／＼」ポツ  
照れて顔を真っ赤にする真耶

(よし、なんとか誤魔化せたな)

「それで、真木先生は今どちらにいますか？お伝えしたいことがあって」

「ん？ドクターなら配属先に挨拶に行ってるとか…、例の面倒な所」

「ああ、新開室ですか…、あそこは今の責任者がちょっと訳ありな人で…」

「たしか自分勝手な人だとかって聞いてたけど」

「はい、暫定責任者として部署のトップにいるのがキーラ博士って  
いうんですけど…」

こうして伊達は食堂の机でコーヒーを啜りながら真耶に詳しく話を  
聞くことになった。そもそも新設工学技術開発室というのは

国際IS委員会が世間的に大きな顔をしているIS学園に半ば押し

つけるようにように発足させた部署である

具体的な活動内容は第三世代の特殊兵器の製造が主であったが、そう簡単に上手くいくはずもなく泣かず飛ばずでほぼ手付かずであった。さらにそこに責任者として措かれたキーラ博士という女性がこれまた曰くつきの人物である。

元々はISに関係ない脳幹系の優秀な研究者だったのだが、被検体を顧みない実験を繰り返し返しその行動を危険視した学会により追放処分をくらったのだが

国際IS委員会の上層部に彼女の親族があり、『一度や二度の失敗で人生を棒に振らせる気か』という“表向きの人道”と

『教師として子供に触れ合うと変わるかもしれない』という取ってつけた理由、そして権力をふりかざし再び表社会へ返り咲かせようとしているのだ。それを聞かされた伊達は顔を伏せ俯いていた

「なるほどね。人間の欲望は堂々巡り、こういう形でしか出来ない奴もいるってことか…」

「それが“上”の意向ですから…」

「それでなまじ優れた腕を持つちまってるもんだから、易々と手放すわけにも行かない訳だ」

呆れたように呟く伊達、世間を達観した目線で見ている彼はこういっただ薄汚い大人の所業を世界中で何度も見ているため怒りを爆発さ

せることはないが

その分言葉には言い表せないような“重み”を感じる

「開発室でも一体何やってるかわからなくて、行ってみれば開発部署を一つそのまま私物化しているんです」

「そっか、困った姉ちゃんだな」

「それで、近いうちに監視者を置くって話が出てきたんです」

「それがドクターって訳か…、大変だなコリヤ」

「委員会に申請が通って、でもそれつきりになって、それで来たのが男性の方なんて…」

「向こうさんもこの問題に取り組む気はゼロ%ってことか」

「他の研究員の皆さんも親族が委員会の上層部だったことで口出しできずにますます大きな顔をされることになって」

「ご機嫌取りの取り巻きも連れてるんだって？道案内してくれた生徒も行ってたよ」

「それなんですよ！」クワツ

そういつてパンツ！と机を叩いて立ち上がる真耶、その弾みで彼女の大きな胸が揺れたのはご愛嬌である

「そうやって生徒に悪影響を与えてしまうのが一番の心配なんです。」

態度が悪いとか教師間で仲が悪いとか、それよりも大事なことってあると思っんですよ」

「まあ、そうだよな、結局何もよくなならない、悪影響しかない訳だしな」

「織斑先生も頭を悩ませていているんです、私も織斑君の件で一度抗議に行ったんですけど…、『教師は教師の畑にいる！』って言われて取り付くしまもなくして」

若いのに苦勞しているんだな…と伊達は一人真耶に対する認識を改める

「あ…、すいません愚痴なんか言っちゃって…、明日から3学期だっというのに。駄目ですよ、私」ハア

「駄目なんかじゃないよ」

「え？」

「山ちゃん先生が悩んでいるのはさ、生徒のことを思っってなんでしょ？」

「は、はあ…」

「俺はまだ教師って仕事もこの学校もよく分からないけど、誰かのために精一杯になっってる時ってのはさ、きつとすんげえ輝いてると思っんだ」

「そ、そんな…恥ずかしいです／＼／」

「ポーズとかポイント稼ぎやカツコ付けじゃないホントの誠意はきつと伝わる！生徒もさ、山ちゃん先生がそうやって自分達の為に一生懸命になってくれる先生だって、きつと分かってるさ」

「そ、そうですか／＼／」

「だからそうやって悩んでいるよりも時には向こう見ずなくらい明るいほうが生徒も安心してくれるって。このコーヒーもさ、こんなに美味しいんだからそんな暗い顔で飲んでちゃ勿体無いぜ」

「…そうですか、そうですよね！教師とか、上に立つ人間とかいう前に傍にいる人間が笑顔じゃないと辛くなるばかりですもんね！」ズズー

「そうそう、その意気よ！いい顔してるよ」

「ふふっ、ありがとうございます。」

思いがけず相談に乗ってもらった形になってしまった真耶だがその心は晴れやかであった

（伊達先生…、昨日あったばかりの私にこんなに親身になってくれるなんて…）

「じゃ、行きましょっか。ドクターの用があるんでしょ？」ゴクゴク

「…あ、そうでした。すっかり忘れてました。エへへ」

「じゃあ、一回連絡とってみるわ」ゴソゴソ

「あ、あの…、」モジモジ

コーヒーを飲み干しポケットのバツタカンを取り出すべく探っている伊達を真耶が呼び止める

「何？」

「あ、あのあの…、また行き詰ったりしたらお話聞いてもらえますか？」モジモジ

「ああ、いつでも聞くとよ。コーヒーを飲みながらね」「ニッ

そういつて目を細め笑いあう伊達と真耶

バツタカンを保健室に置きっぱなしにしていることに気づき、結局真耶と一緒に保健室に向かうことになった。そんな午後14:00  
天気は快晴である

伊達は真耶をつれ一度保健室に戻ることになった

すると保健室の中から騒がしい声が聞こえてくる

「ねえねえ、このお人形少し見せてくださいよ」

「YA-ME-RO！」

「あ、あの…あんまり保健室で騒がない方が…」

戸を開けた伊達が見たものとはキヨちゃんに興味津津で声を荒げる

おばあちゃん先生と渡すまいとする真木、

それをまずそうな目で見ている簪、そしてなぜか真木の頬には湿布が貼ってあった

「お、何か賑やかだねえ！何盛り上がったんの？」

「あれ？真木先生、ここにいたんですか？ってそのケガ！どうかなさったんですか？」

「いえ、ふとした弾みで、気にすることではありません」

「怪私の具合じゃなくてなんでそうなったのか聞いてんだよ、まさか道端で転んだとかじゃあるまいし」

「…あの、開発室ですこし揉めちゃったみたいで…」

おずおずと口を開く簪、どうやら真木を連れてきたのは彼女らしいと伊達は推測した

「赴任早々トラブル起こすなんて、ドクターも弾けちゃってるねえ」

「はあ、そういうものですか…」

呆れたような真耶の口ぶりに人知れず簪は顔を伏せて俯く

（言えない…、まさか突き飛ばされた拍子に人形が落ちて拳動不審になったのを頭打っておかしくなったと勘違いしたなんて言えない…）

「まあいいやどかり草団子…じゃなかった。山ちゃん先生がドクターに用があるんだって」

「あ、はい真木先生には教壇に立っていただくので準備室が用意されてるんです。配布する資料に書いてなかったみたいなので…」

「そうでしたか、それはどうも」

「それでなんですけど…、この部屋がですね…これまでIS学園に來られた男性教員の方が使われていた部屋なんです」

「何それ、化けて出るなんて言わないでよ」

「いえ、そんな学園七不思議のスポットなんかじゃないんですけど、前の方の荷物が順々に残されたままなので、その辺の片づけとかもやっておいて欲しいんです」

「ああ、体よく押しつけられた訳ね」

「はい！よろしく願いますね」

（開き直った…）

「でしたら話は早い、案内していただけますか？」

コートを着なおし立ち上がる真木

「ドクターいいなあ、俺も部屋とか欲しいなあ」

「ああ、伊達先生には保健室があるじゃないの。それともこんな

おばあちゃんが一緒じゃ退屈？」

「い、いえそういう意味じゃないんですけど、これはあくまで……」

「ふふ、わかってますよ。伊達先生、今日はもうあがって結構ですから真木先生のお手伝いをしてあげて下さいな」

おばあちゃん先生に翻弄されつつも伊達は保健室を出る準備を始める

「そろそろ行きますよ。準備は終わってますか？」

「あ、私も行きます……いいですか？」

簪がそういつて手をあげると真耶はにっこりとほほ笑む

「ええ、じゃあ行きましょうか」

更識簪は極めて内向的な性格であった

優秀な姉と比べて凡人である自分を見返させる為に一人で意固地になりますます深みに落ち込んでゆく

だが織斑一夏と出会ったことで氷のように冷え固まっていた心は嘗ての温かさを取り戻した

真耶はクラスは違えどもそんな生徒の成長が嬉しかったのだ

## 相談とコーヒーとドクターの天敵（後書き）

### 解説コーナー

今回は保健室の主、おばあちゃん先生こと石下啓呼いわしたけいこ

26歳で養護教諭として働きだし、以後30年に渡り若者のメンタルケアに勤めてきた

その経験を活かし、IS学園でも国や人種にとらわれない幅広い活動をしている

人柄は温厚誠実でノリもいい、ほんのり暖かい人と言われる

既婚者であり夫は専業主夫であり、たまに惚気る

あまり知られていないが“カワイイもの”に対しての情熱の振れ幅が他人とかなりズレている。真木の人形に過剰に反応したのもそのため。

サブタイトルのドクターの天敵は彼女である、いろんな意味で

名前は旅先で出会った土産物屋のおかみさんから頂きました

では次回もよろしくお願ひします

「次回はカワイイ人形の持ち主、真木先生のお話よ、ウフフ」

**掃除とお茶会と明日は新学期（前書き）**

今回の話は予約掲載で投稿します

うまく出来てるでしょうか？

## 掃除とお茶会と明日は新学期

真木に与えられた準備室への道中、先導している真耶は簪と何やら楽しそうに話をしている

伊達は真木の隣でいろいろ聞きこんでいた

「で、どうだったよ。配属先は？まあそのザマじゃ碌な事なかったんだろっけど」

「ええ、入るや否や罵詈雑言の嵐でしたよ」

「ヤバげな実験とかしてなかったか？」

「さあ？入った途端に大騒ぎされた上にモニターも消されたので何とも」

「その怪我也そのときに出来たやつみたいだな。グリードって怪我すんの？」

声を小さくして身がかがめ子供がこしょこしょ話をするように問いかける伊達

「具合にもよりますが、セルメダルの消費を防ぐのと周りに不信感を与えないようにここではあえて人間の形をとっているだけです」

「なるほど、ドクターも考えてるんだな」

「考えている、といえばこれを君に渡しておきましょう」

そういつて真木が渡したものは書類の束、そう、伊達の大嫌いなマニュアルであった

「この世界の年史はほぼ我々のいた世界と変わりはありません、しかし近年軍事面において決定的な発明がなされたのです。それがインフィニット・ストラトス」

「インフィニット・ストラトス？って何？」

「わかり易くいえばパワードスーツのようなものです。今のところ兵器として使用された例はないようですが…」

「ってゆうかさあ、ドクター俺がマニュアル苦手なの知ってんでしょ？俺を虐めてんの？」

「不本意とはいえ我々はこうして教育に携わる身となったのです。これを機にマニュアル嫌いを直したほうが良いでしょう」

「そう言われると何も返せねえな…、お、もう着いたのか」

先導していた真耶と簪が部屋の前で待っていた

「お待たせしました、ここが真木先生の部屋です」

そういつてカードキーを通しドアを開く

「うっわ、汚え〜」

汚れているとかそういつわけではなく。部屋の中には、これまでの

辞めていった研究員が遺した機材やコンピューター、資料などがダンボールに入れられたまま手付かずになっていた

（持ってきたはいいけど、パウハラが凄すぎて精神病んじまったとかそんなところか？）

そういいながら伊達はデスクの上に置いてある『連絡ノート』と書かれた大学ノートが置いてあった

ふと手にとってパラパラと捲ってみる。そこには新開室のスタッフへの恨み辛み、放送規制がかかること間違いなしの口汚い罵り文句がびっしりと書かれているではないか

文字の書き方がページを捲る度が変わっており恨みの度合いが推し量れる

（これにセルメダルいれたらすんげえヤミーが生まれそうだな…）

伊達はこれを真木に見せると面倒なことになると察知し、こっさり備え付けのゴミ箱に掘り込む

「じゃあ、私はこれで失礼します。明日は始業式ですから遅れないようにしてくださいね。それじゃ、あ、あとこのダンボール達をもてあましたら隣の部屋を使ってもらって結構ですから」スタスタ

「やっぱり手伝ってくんねえんだ…。」

「仕方ないでしょう、彼女も学級副担任。やるべき仕事があるはずですから」

「そりゃそうか、で？君はどうするの？」

伊達は部屋の中でキョロキョロしていた簪に話しかける

「あ、あの、私は…その…」

「今日はもう帰りなよ、今から力仕事だし。おっさん二人が汗臭い仕事してる所なんて見てて楽しくないぜ!？」

罰が悪そうに目を合わせる伊達と真木

「そうですね…、じゃあ失礼します。頑張ってくださいね！」

狭っ苦しい部屋に残った男二人、伊達は全体の見取りを眺めつつ真木は段ボールの中身を確認していた

この閉塞感が二人にとって馴染み深いある一室を思い出させる

「ドクター」「伊達君」

二人は同じタイミングでお互いを呼び合う

「……………」

「………」

「OK、用具入れはこの先だな？そっちは俺がやるわ」

「お願いします、私は電気系統の調整を」

「よっしゃ！いつちよやりますか」

こうして二人はお互いの仕事を確認し、やるべきことに取り組んでいく

真木の準備室から5つほど間を開けたところにある部屋、生徒会室  
ISの特訓を終えた一夏と楯無が生徒会室に向かってしていると伊達たちと別れた簪と遭遇した

「あ…、お姉ちゃん、それに織斑君も…」

「あら？簪ちゃん。お姉ちゃんに会いに来てくれたのかしら？嬉しいわ〜」ダキッ

「お姉ちゃん…く、苦しい」

「はは、これから生徒会室でみんなでお茶するんだけど、よかつたら一緒にどうだ？」

「おいしいお菓子もあるわよ」

「う、うん。じゃあ行こうかな…」

「はい、それじゃ一名様ごらいて〜ん」

そういつてドアをくぐる三人、生徒会室には本音とその姉である虚が時間を見計らいお茶を淹れて待っていた

こうして楽しいティータイムが始まった

「そーいえば、明後日は模擬戦やるんだってねえ、おりむーも特訓頑張ってるんだね」モグモグ

「ああ、俺結構手ごたえありましたよね？楯無さん」

「そうねえ、初めのころに比べれば、ね？」

「手厳しいな」

「今回のはかなり特殊なシステムらしいわね。委員会推奨とか言われてるやり方だって聞いています」

模擬戦への意気込みを語る一夏、虚は今回の模擬戦の説明を加える学園の専用機持ち全員と、学園の教師とのシールドエネルギーが尽きて無くなるまでの出し切り勝負をやることになっているそうだ

生徒代表のトリを勤めるのが簪である

「委員会推奨とか言ってるけど…、実態はどうなってるんでしょうねーどうせ金とか利権とか動いてんでしょうね」モグモグ

「お姉ちゃん…、あんまりそういう事は言わない方が…」

「いいのよ、悪口は聞こえないから悪口っていうんだから」

「言いたい放題ですね…」

「だってそうじゃない、あれやこれや押しつけるくせに学園こっちの要求

は全然聞かないんだもん」

「おまけに変な部署作ってくれちゃってますしね」

「そう、そうなのよアレのせいで整備科のモチベーション下がるわ授業でトラブル起こすわクレーム多いわで大変なんだから」

「お姉ちゃんも大変なんだね…」

「他人事じゃないわよ！簪ちゃんも、今回の模擬戦に向けての整備、なんでよりにもよってあの新開室の連中に頼んじやったの？整備科の腕利き紹介するって言ったじゃない」

「そ、それが…しつこく迫られちゃって…一時間くらい説得されて“うん”って言わないと帰れない雰囲気だったから…ごめんなさい」  
叱られムードになり落ち込む簪、あわてて一夏がフォローに入る

「そ、そうだ、楯無さん新任の先生に会ったそうですよね、どうでしたか？」

「どうもこうも、あんな変な人たち初めてよ。二人ともそれなりにいい男だったけど」

「そうそう、変な人たちでしたよね、アハハ」

「まきせんせーは新開室の管理責任者になったんだって、かんちゃんが今朝から居なかったのって…」

「うん…、真木先生に頼んで一度機体を返してもらおうと思ったん

「だけど…」

「やっぱり真木先生もキーラ博士に…」

「うん、2階まで響きそうな声で罵られて、研究室から追い出された揚句壁に顔ぶつけてケガしてた」

「あの博士ほんとヤナ奴よね、いちいち生徒に張り合っちゃって」

「理論も根拠と実例があってないから支離滅裂なんですよね」

「というより押しつけがましいのよね。力量は悪くないんでしょうけど」

（何かワイドショーにケチ付けまくってる主婦仲間みたいになってる…女つてコエ…）

「一夏君！」

「は、はいッ！」

「今何か失礼なこと考えたでしょ!？」

ガン！ ガン！

「い、いやあ…何の事だかさっぱり…」

ガン！ ガン！

「お姉さんに嘘ついてても為にならないわよ。いいから正直に…」

ガン！ ガン！

「さっきから何なのよ！ 工事でもやってるのかしら？」

ポッコオン！

「ウワツすつげえ音がしたな……」

「今来た部屋の方向からだ……まさか！」 ダツ

簪が思い出したように立ち上がり生徒会室から走り去る

「ちよつと、簪ちゃん？」 ダツ

「おい、簪！？」 ガタツ

追って一夏と楯無も部屋を出る

「おもしろそ〜、わたしもいこ〜つと」 パタパタ

「あ、ちよつと……、はあ、落ち着きないんだから」

残された虚は一人溜息をつくのだった

「ハアハア、やっぱりここだ……」

「簪ちゃん、ここ何の部屋？」

「ここって歴代男性職員が使っていた準備室、（通称“兵共の夢の

痕”）もしかして新しく来た先生もこの部屋使うの？」

「うん、真木先生が使うことになってるんだけど……」

その時入口の自動ドアがシューと音を立てて開くと中から土煙と共に上半身裸の伊達が出てきた

「ゴホツゴホツ、ちゃんと換気しろよドクター！ゲホツ」

「伊達先生……、何やってんすか？」

「んあ？つっておおお、君は確か織斑……だっけ？生徒会長さんも……何の用だよ今忙しいんだ」

「ふえ〜、改装工事やってる〜」

本音がドアから部屋の中を覗く

「コ、コラ！見ちゃダメだったの」

「スツゴ〜イ、壁にあんな大穴開けて……、警報装置ならなかったの？」

「ここら一带の警報機器はあらかじめカットしています。何か御迷惑をお掛けしましたか？」

床下収納のようなスペースからひよっこり頭を出した真木の姿はどこかコミカルだった、頭頂部に大の字でへばりついたキヨちゃんがさらに笑いを誘う。慌てて一夏が返答する



「伊達君、無駄話をしている暇があるなら作業を急いでください」

「ああ、分かってるよ。じゃあそついう訳だから」

「あ、よかつたら俺手伝いますよ」

「結構です」

「でも、急いでるんじゃない」

「結構です」

床下から顔だけ出したままの真木が冷たい口調で言い放つ

「悪いな、ドクター仕事に割って入られるの由としてねえんだ」

「一夏君、これが境界線よ」

「そ。さすが生徒会長分かってんじゃない」

「よし、それじゃ帰りましょうか、ごめんなさいねお邪魔しちゃって」

「おう、先生には敬語使えよ」

「せんせー、また明日ー」ブンブンバサバサ

「失礼します」ペコリ

「先生、俺男一人だったからすんげえ窮屈だったんだけど何か楽し

くなりそうだよ」

「そ、そうか？…そいつぁ良かった」

「伊達君！」

「はいはい、分かったよ」

こうして真木と伊達の突貫工事は明け方まで続き

本音や一夏により“二人の男性新任教師”の噂があつという間に広がり寮内はパニック・ナイトとなっていた

そんなこんなで迎えた翌日、三学期の始業式。全校生徒の期待の中、式は始まる

## 掃除とお茶会と明日は新学期（後書き）

### 解説コーナー

ドクターの準備室、お察しのよい方はもうお気づきでしょうが、この部屋はドクターの研究室になりました。

この部屋からはこれからいくつもの発明が生まれることでしょう

## 始業式とチャンスとお願い（前書き）

オーズ終わってしまいましたね…

設定もさることながら、映画出演作が四本と密度もハンパなかったですね。

そして冬にはMOVIE大戦も控えています

本当に最高の一年間でした。製作に携わったキャストさん、スタッフさん、そして作品をいっしょに盛り上げていったファンのみならず本当にありがとうございました。

## 始業式とチャンスとお願い

IS学園・体育館 三学期始業式

生徒たちが入ってきてきて体育館はざわついている。昨夜から話題は新任の男性教師でもちきりだ

ザワザワ

「ねえねえ！三学期から来るって男の先生の話、聞いた？」

「新任の先生ですって！」

ザワザワ

「聞いた聞いた！どうしようイケメンだったら！」

ザワザワ

「っひゃあゝ、早速話題になってるな。俺達得だったな筈？」

「そうだな、まさか一昨日に先に会っているとは誰も思っまい」

一年一組の一夏と筈も体育館の騒ぎっぷりに驚いてる

そこに二組の鳳鈴音が話しかけてくる

「ねえ一夏、筈、あんたたち新しい先生に会ったって聞いたけど、どんな人だったの？教えなさいよ」

「ええ！一夏さんと篤さん、もうお会いになられたんですの？」  
傍にいたセシリア・オルコットも驚いて話しかけてくる

「ああ、二人でいたときに…偶々な」

「ちょっと待って、二人でってどういうことよ！」

「お二人で何をしてたのか、詳しく説明してもらいますわよ」

「べ、別にやましいことなど何もしてはいないぞ！」

「そうだ、芝生で膝m」

「わーわー、何も言わなくていいからな！変なことは何もなかったからな！」アセアセ

慌てて一夏の口を塞ぐ篤、鈴とセシリアはそんな二人をジト目で見つめる、その時

スパーン スパーン スパーン スパーン

均等なリズムで四人の頭を出席簿が襲う

「そろそろ始まるぞ、いつまでくっっちゃべってるつもりだ」

「……は……い……」……ヒリヒリ

そして始まる始業式

理事長の長〜いありがたくない話が終わると今度は楯無が舞台上に立ち全校生徒に挨拶する

「皆さん、あけましておめでと〜ございます」

「昨年はいろいろありましたが、今年も昨年に負けない勢いで頑張つて行きましょう」

楯無はそのあと実家の庭の木がどうしたとか、池の鯉が元気だったとか、他人との会話で特に役に立たないであろう話を続ける

彼女と親しい者は改めて楯無が名家のお嬢様であることを再認識するのだった。

名家の育ちでありながら嫌味さを感じさせないのはひとえに彼女の人柄の良さの賜物であろう

話を一通り終わらせると・・・

「そして、皆さんお待ちかねのお〜、新しい先生の紹介です」

館内がワーワーと騒がしくなる

「いや〜、この時期に男の先生が来るなんてお姉さんびっくりだわ〜」

「しかも！なんと二人もやってくるんです。これはお得よね〜」

二人も来ると聞いて体育館内はさらに沸き立つ

「二人ですって、ステキー」

「地球に生まれて良かったー」

おほん、と一息置く楯無

「お二人ともとてもステキな男の人たちですよ」

「それでは上がってきてもらいましょう。どうぞー!」

そういつて舞台袖に手を差し向ける楯無

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

その頃、舞台袖では・・・

(またあの夢を見た…)

白い世界でたったひとり、そして奥から現れる黒い人影…

伊達は昨夜の突貫工事の後、そのまま準備室に寝入って見た例の夢を思い返しながら

内ポケットから煙草の箱を取り出すクシャクシャになった箱からは『ライオンハート』という綴りが

英語で見られる、伊達が愛飲している煙草の銘柄だ

煙草に火をつけ肺の中にゆっくり煙を満たしていく

「…達君」

（どこかで会ったような感覚だったが…あれは一体…）フウ

「伊達君」

「うおっ、何だよ？」

「更識君の挨拶が始まりました。そろそろ壇上にあがる頃です」

「分かったよ…なあ、ドクター」

「何ですか？」

「ドクターさあ、結構この状況楽しんでない？」

「気のせいでしょう」

「そうかい」

「それはそうと伊達君、君は喫煙者だったんですね」

「ん、まあな」

「もとの世界にいたころはそのような様子は見られませんでしたが」

「気のせいじゃね」

「そうですか」

『それでは上がってきてもらいましょう。どうぞ!』

「そんじゃ行きますか」

火を灯した煙草を早々に携帯灰皿に押し込む

爪先を地面に打ちならし踵を直し、伊達と真木は壇上に上がる

二人が上がると館内からは拍手と歓声が湧きあがる

ワアアアー

「すごい長身!白衣の方は男らしい顔をしてるわ!」

「眼鏡をかけてらっしゃるほうもスマートで素敵!」

「あの眼鏡が知性を醸し出しているわね!!けどあの人形何かしら?」

「は〜い、皆さんお静かに!それじゃあ自己紹介と挨拶をお願いします」

そう言つて楯無は一旦マイクのスイッチを切りスタンドから外し伊達に渡す

「…まるで映画の舞台挨拶だなこりゃ」

「さすが女子校…といったところでしょうか」

「同じ境遇の人間がいるってだけで心強いよ、ドクター」

「それはどうも…、挨拶は先に済ませてください」

「わあったよ」

カチツ キー ン

「アア、えーっと…どうも、伊達明っていいいます」

「長い間世界中を医療支援しながら旅してて…、巡り巡ってこの学園の養護教諭になりました」

「普段は保健室にすることが多いな」

「メンタルケアから臓器移植まで一通りこなせるぞ、手術は俺の仕事じゃないみたいだけど」

「とりあえず見かけたら声掛けてくれると嬉しいかな」

「そんな訳でヨロシク!!」「ビシッ

軽い調子で挨拶を終えると、生徒達がワァァ と騒がしくなる

「お医者様ですって！ステキ」

「あの着崩したスタイルがワイルドでいいわー」

「ほい、次はドクターね！」

伊達からマイクを預かった真木は口元に沿え、あくまで目線はキョちゃんに向けたまま挨拶を始める

「どうも、整備の座学と実技担当の真木清人と申します」

「出会いは別れへの旅の始まり、その終わりを善き物にする為、皆さんの学生生活の彩りに尽力させていただきます」

真木は挨拶を終えマイクのスイッチを切り楯無に渡す

「メガネの先生のほうはすこしお堅いわねっ」

「知的でダンディ、嫌いじゃないわ!!」

伊達が挨拶をしたときののように生徒たちは騒がしくなる

唯一の男子生徒である一夏として例外ではなかった、まあ尤も他の女生徒ほど騒がしくなかったのは言うまでもなかったが

「はは…、これじゃまるで転校生みたいだな」

「だれかさんの自己紹介なんて見る影も無かったものなあ？」

「な、それは言わないでくれよ」

織斑一夏の自己紹介、もう何ヶ月も前の話である

とあるアクシデントによりISを起動させてしまい世界中の注目の的となり

そして後の生き方を否応無く決められたあの日、入学式の後の教室で文字通り右も左も分からない一夏の自己紹介は散々なものだったそんなこともあったな、と口元を緩ませる一夏

今思えばあれは現実を受け入れられない未熟だった自分のささやかな抵抗だったのかもしれない

「はい、ありがとうございます、この後は質問タイム」と行きたかったところなんだけど、もうホームルームが始まる時間だから今日は無理ね」

「あ、でも真木先生は授業で会うことも多いから大丈夫よ」

「伊達先生も保健室に居る事が多いみたいだから、体調悪くなった子はチャンスね」

そんな理由で来られても・・・と一人苦笑する伊達

「それじゃ、新任の先生の挨拶はこれでお終い、お二人ともどうもありがとうございます」パチパチ

挨拶を終えた伊達と真木は舞台袖に下がっていく

「ドクター挨拶上手かったじゃん、ばっちり練習してきたの？」

「それは暗に私が人前に出るのが苦手な人間であると揶揄しているのですか？」

「そうじゃねえけどさ、演説とか講習とかやる人間じゃねえでしょ

「?ドクターって」

「確かにここ数年はそうだったことはしていませんでしたが、鴻上会長からスカウトされるまでは流れであちこち研究員をやっていたので大勢の前でしゃべる機会には事欠きませんでしたよ」

「なるほどね、恐れ入ったよ」

「では、わたしは次の時限から授業がありますのでお先に」

・・・

「ああ、頑張つてな。真木先生」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「昼休み、食堂でなー」

真木は何も言わず去っていく

「さて、俺も行きましようかね」

そういつて伊達は保健室に向かうべく歩く

「そつだ、職員室寄つてミルク缶取ってきた方がいいな」

職員室は授業に行く先生の大半が出て行って今は少ししか居ない

「先生つて忙しいんだねえ」

ミルク缶を担ぎなおした伊達は足早に保健室に向かおうとする、その時

「伊達先生、今お暇ですか？」

「ああ、山ちゃん先生、何か用？」

「まだその呼び方するんですか、はあ、まあいいです」

「はは、山ちゃん先生は授業とか無いの？」

「ええ、この後SHRなんですけど、それでちょっとお願いが…」

「？」

## 始業式とチャンスとお願い（後書き）

### 解説コーナー

今回伊達さんが吸っていた煙草『ライオンハート』ですが、rihitoさんのIS作品から元ネタを頂戴させていただきました

### オリジナル設定

オーストラリア原産の銘柄の一つで伊達は医療活動の一環で訪れた際に買いそのまま気にいって日本に戻っても吸うようになった

だが頭に銃弾が入った怪我の一件で願掛けで治るまで喫煙をやめるようにしていたため、治った後のISの世界で遠慮なく吸っているわけです

パッケージのイラストは、アジアン調に描かれたライオンの顔の右目にハートマークが付いているイメージです

rihitoさんどうもありがとうございました

次回もよろしくお願いします

**電気と約束と鋭い目つき（前書き）**

ご無沙汰してました、久々の投稿です

SS速報VIPの方もどうぞよろしくお願いします

質問、ご指摘あればよろしく願います

## 電気と約束と鋭い目つき

始業式の終わった頃、一年一組にて

「どんな先生だろって思ってたけど想像以上な人たちだったね、ラウラさん」

「怪しい二人組だったな、しかし男にISの講師が務まるのか？」

「あはは、真木って先生は変な人形持ってたね」

始業式が終わった後も教室では女の子達がわいのわいのと騒いでいた

「え、本音新しい男の先生にもう会ったの？」

「うん、一昨日と昨日にね、二人とも背が凄く高くてもってモカッコ良かったんだよ」

「織斑君とどつちがカッコ良かった？」

「うん、よく分かんないかな」

「でも、伊達って先生男らしい顔してたわよね！」

「真木先生もクールでミステリアスよね」

そして学園唯一の男子生徒、織斑一夏にも話題は降りかかる

「ねえ一夏！男の先生が来るって本当だったんだね。一夏はどう思

「うっ？」

「どどつて……、そうだなあ、言ってもあの二人は先生だからなあ。」

「最初男としてここにやってきたシャルが女だって分かったときがっかりしたけど」

「うう……し、仕方が無いじゃない！あの時はしょうがなかったんだよ」

「分かってるよ、そういう意味で言ったんじゃない。」

「まあ、あれだな。今回は疑うべくも無く“男”だからな。伊達先生は結構話し易い方だったからちよつと気楽かな？」

「そっか、良かったねー夏」

ふと教室の外を見ると人影があった

真耶が教室の開きっぱなしの入り口の戸の近くで誰かと話している

「あれ？山田先生が……、予鈴もう鳴ったか？」

「ううん、まだの筈だよ……」

踵を返し教室内に入ってくる真耶とその後ろには……

「あれ？山田先生の後ろ……、伊達先生よ」

「キヤアアア、皆！一大事よ一大事！」

「すごい長身ね、腕も太くてたくましい」

話題の人である伊達が

「おーおー、すげえ騒ぎようだな」

「すみません…、はい、ちょっと静かにしてくださいね」

パンパンと手を叩き生徒達を鎮める真耶

ミルク缶を背負う伊達のもう片方の手には蛍光灯が握られていた

「あー、あそこね。電気切れてるの」

「あ、はいすみません、お忙しいところを」

「いいよ、どうせ暇だったから」

靴ひもを直しながら答える伊達、その様子を見た生徒達も気づく

「あ、その蛍光灯切れてるわ」

「2学期の終わりから切れてなかったかしら？」

「一か月近く放置してたのかよ…、山ちゃん先生もズボラだな」

「だからその呼び方止めて下さいって言うてるじゃないですかあ」

ポカポカと伊達の胸板を拳を握って叩く真耶、生徒たちからクスクスと笑い声が聞こえる

「山ちゃん先生だって、カワイイ」

「山田先生顔真っ赤」

「山ちゃん先生」「山ちゃん先生」

生徒達がからかって呼んでいると真耶の顔はさらに赤くなる

「もぉー、生徒たちが真似したー！責任とって下さいよぉ」グスッ

涙目になって抵抗する真耶、今にも泣き出してしまいそうだ

(あちゃー、やりすぎたか…)(ちょっとからかい過ぎたかな?)

急にクラスに気まずい空気が…

やっちまったという顔をしながら伊達は近くにいた出席番号一番の相川清香に小声でたずねる

「なあ、これって俺のせいかな？」ポソポソ

「たぶん…、というか絶対」ポソポソ

その後どうにかして真耶の機嫌を直した伊達、その際の条件として食堂のパフェをご馳走する約束を交わしたらしい

それを聞いた何人かの生徒がズルイなどと口にしていたが八割方無

視し作業に進む

「そつだ、話がこじれちゃったけど蛍光灯替えなきゃ」

「はっ、そつでした！」

「当然だけど届かないよね」

「そつ…ですね」

「じゃあねえ、よし！その少年！」

「お、俺ですか？」

「悪いんだけど、ちょっとこっち来てくれない？」

「いいですけど…、俺は織斑一夏って名前が…」

「わーったわーった、織斑ちゃんね。ちょっとこれ持って」

「ちゃんて…、脚立取ってくるんですか？」

「いらないよ、ちゃんと持ってるよ？つよつとお」「ガシッ

蛍光灯を一旦一夏に預け伊達は一夏の腰を自らの右肩に乗せそのまま立ち上がる

「おわつとお、ちよ、先生」

「軽いねえ、ちゃんとメシ食ってるか？」

「食べてますよ！これ替えりゃいいんですよ？」

このやりとりを見ていた周りの女子からは溜め息が“ほう”と漏れる

「男同士って絵になるわねえ」

「織斑×伊達先生！今年の夏はこれで決まりだ」

「一夏…、僕も男の子だったころにはあんなことしてくれてたのかな」

「あの新任教師…、人の嫁に勝手な真似を…」

「よし、取り付け完了！」

「よっしゃ、降ろすぞ」

「どうもありがとございました」

「せんせーありがとー」

「大変美味しゅうございました」ジュルリ

一部変な言葉が聞こえたが気にはしない、すると本鈴が鳴った

「よし、じゃあ俺はそろそろ戻ろっかな」

「えー、そんなん」

「待つてよ、せっかく来たんだから伊達先生の事もつと教えてよお」

「旅の話聞かせてー」

「そんなこと言ったってなあ、どうよ山ちゃん先生」

「私も伊達先生のお話聞きたいです」キラキラ

目を輝かせて伊達に迫る真耶

(参ったなあ、あんまり得意じゃねえんだけど…)

「っていうか、授業しなくていいの？もう本鈴なっただじゃん」

「大丈夫です！担任の織斑先生も職員会議でまだ来てないみたいですから」

「織斑先生？…ああ、あの気難しそうな顔した釣り目のネーちゃんね」

「」「ツツ!!」「」

伊達の千冬に対する第一印象を聞き教室内は騒然となる

もちろん伊達に悪意はないのだがISが良くも悪くも社会の主流となっている今の社会で一部では神格化さえされている千冬に対してこの言い様はかなり衝撃的だった

「き、気難しそうって…、なんて恐れを知らない…」

「千冬姉にそんなイメージ持つ人間初めて見た…」

「あれ？何か俺まずいこと言っちゃった？」

伊達が？マークを頭に浮かべると一人の生徒がバンツ！と机を叩き立ち上がる

「貴様ツ！教官を侮辱しているのかッ！」

「ちよつと、ラウラ落ち着いて！」

今にも掴みかからんとするラウラを抑え込むクラスメイト

真耶が慌てて伊達に詰め寄る

「だ、ダメですよ織斑先生は元、いえ今でも世界最強のIS操縦者なんです。そんな無礼な口を訊いちゃ」

「そうですよ伊達先生、偉い人なんですよ織斑先生は、そんな軽口叩くなんて狼藉見過ごせません」

本来教室にあるべき黒板の位置に存在する立体映像のスクリーンに映し出される千冬の顔写真や現役時代の映像を見ながら

感心するような顔をする伊達

「ワリ ワリ、日本に帰ってきたのちよつと一昨日なんだ、織斑先生がそんなにすごい人だったなんてな」

「思ってもみなかったわ。ゴメンな」

頭を下げながら言葉をつなぐ

「確かに人を見かけで判断するのは良くなかった、先生らしく無いよな」

「反省しなくちゃな………けど！」

申し訳なさそうな台詞を吐いていた伊達だが語尾を切り上げ話を盛り返す

「強いとか、偉いとか、そんな理由で逆らっちゃ駄目とか言うこと聞かないと駄目とか、そういうのは正しいと思わないな」

そう言いながらスマートフォン接続端子にケーブルを繋ぎスクリーンに画像を投影していく

様々な国名の書かれたフォルダから一つのファイルを開き写真をスクロールしていく

「挨拶の時も言ったけど、医療支援しながら世界中を回っていたんだ」

「世界中の貧困・紛争地域や難民居留区とかな」

写真には赤茶けた地面に掘って立てた簡易テントで治療を行う伊達や他の医師達の姿が映っている

目で追いながら順々に画面をスクロールしていく、現地の子供と戯れている姿や白い布をかけられた冷たくなってしまった体の前で力

なく座り込んでいる姿

「何年も世界中巡ってりゃ、いろんなことがあったよ」

「流行り病に罹って死にそうになったり、紛争に巻き込まれたり」

「嫌ってほど自分の無力さを感じさせられた事もあるし、時には銃を持たされて戦場に駆り出された事もある」

白衣を土や泥で汚した姿に銃を抱えた伊達の姿が映った写真でスクロールをとめる、よく見ると裾の方に焦げ跡や返り血のようなものも見える

最初の方は隣の友達と談笑しながら聞いていた女子たちも話が進むにつれ無言のまま前を向いていた

「俺達も含めてこういう連中はな、生きることにはもう必死になってるんだよ」

「生きて帰れりゃ儲けもの、だれに褒められるでもなく一所懸命戦ってるんだ」

教室が完全に静寂に包まれる

「一歩戦場に踏み込めばそいつの持つてる金や地位（ステータス）なんて関係ない、ただ一つの武器を持った命が一つあるだけなんだ、それでも必死に戦う、なんでかわかる？それでも守りたいものがあるからだよ」

「まあ、とにかくあれよ、ISの事は気の利いた兵器だって事ぐら

いしか知らないけど、戦争とか命の現場とかそういうのを人よりいっぱい見てきた俺から言わせると」

「本当に大事にしたいもの」と“傷つける理由”ってのはちゃんと自分で見つけたってこと」

「じゃないと自分で自分に嘘ついて泣かせちまうことになるからね」  
話を終え一呼吸置く伊達

シ〜〜〜ン

教室は相変わらず静かだ、見渡すと俯いてる女子もいる

(あれ？またなんか変なこと言っちゃった？)クルツ

?マークを浮かべながら真耶の方を振り返る伊達、彼の目に映った真耶の姿は…

「ウエツ、…エグツ…グスツ、グスン…伊達先生エ〜」ポロポロ

嗚咽を漏らし涙を流しながら真耶は伊達の手をガツシと掴む

「感動しましたッ！伊達先生がそんなに思慮深い方だったなんて！」

「えっ、いやあの…もしも〜し」

「辛い経験をされてきたからこそ命の大切さを教えるために教鞭をふるうなんて、素敵です！」

「え、いや、そういう意味で言ったんじゃない」

狼狽しながら教室を見渡すと生徒達がワツと湧きながら羨望や尊敬といった煌めいた視線でこちらを見ている

「海外で医療支援なんて立派だわ」キラキラ

「すっげえよ、命を助けるなんて伊達先生最高だよ」キラキラ

「医者としての実績も十分なのね、すこし見直しちゃった」キラキラ

「認めたくはないがああの構え方は堂に入ってるな」ウヌヌ

「ラウラ…、そこは関係ないと思うよ」

どうやらこの一件で伊達の評価は随分上がってしまったようだ、しかし当の伊達はこの反応に難色を示している

「ちょっと待ってよ！俺の言ってる事あんまり伝わって無いじゃん！」

「確かに一般的に見れば“良い事”で済まされるような事はしてたよ、けどそれはもう済んだことじゃない」

豹変した伊達にクラス中はポカンとなる

「そのお…、称号とか資格よりもその先ツつつか…だあぁ〜な  
んて言ったらいいかわかんねえ」

頭を掻きながらやり切れない表情をする伊達、上手く言葉が出てこ

ないのだ。そのとき…

「要は外面で判断してほしくない、だからと言って肩書きや経歴で話を片付けられるのも嫌、という訳か」

「何も考えてないような顔をしていて中々我儘な男だな」

突然背後から自分の心情を的確に解説され、目を瞑り自嘲的にふつと息を漏らす

痛いところを突かれたな、と思いながら声のする方に喋りかけながら振り向くがその表情は凍りつくことになる

「まあそう言われると辛えけど、自分なりの生き方ってやつk…」  
ピシィッ

その先にいた人物こそ、伊達がこの話をする切っ掛けになってしまった人物、織斑千冬その人である

「私がない間に随分話が盛り上がっていたようだな、どうぞ続けて貰って結構ですよ？伊・達・先・生」

やや冷っぽい流し目を送る千冬、表情から察するに話の内容は全て聞かれていたようだ、特に怒っているような様子ではなかった

「いや、盛り上がってきたつつつか…、もうクライマックスも終盤辺りなだけ…」

途切れ途切れになりながら返事をする伊達、仕方ないといった表情で鼻息を鳴らし話を続ける

「まあなんつうか、大事だと思うならそう思えるだけ相手の事知ってほしい」

「ちゃんと自分の本質を見てほしい、それが大事よ」

思いがけずまるで演説の真似ごとをしてしまった伊達はすこし照れたように頭をかく

「ごめんな、初対面でこんな説教臭えこと言っちゃまって」

「せっかくこうして出会えたんだし、当然のことかもしれないけど目に映るものを大事に思えるようになりたいよな」

「この学校ではじめて入った教室にいた皆や」

「」「キュンツノノ」「」

「山ちゃん先生だってそう」

「えっノノいや、そんな…、まだ早いでしょうノノ」「テレビテレビ

「もちろん、織斑先生もね」

「」……………「フン」

( ) ちよつとクサかったかな？ま、子供相手にはこれぐらいがちよつどいいよな？)

「じゃあ俺はそろそろこの辺で！またどこかで会ったら声かけてよ」

「え、もう行っちゃうんですかあ」

「ワリーな、でももう授業始まってんだろ？」チラリ

そういつて伊達は視線を移す、その先にいた千冬は息を軽く吸い

「そうだな、さあ席に着け！気難しい顔したツリ目のねーちゃんの授業をはじめろぞ」

教室が一斉にドヨドヨとした不穏な空気が流れる、どこことなく千冬から発する雰囲気は冷ややかなままだ

「あちゃー、やっぱり聞かれちゃってたか…」

気まずそうに頭の後ろのほうをポリポリと掻く伊達

「あれだけ大きな声で話していれば当然よね…」

「織斑先生…、口元は笑ってても目が笑っていない…」

伊達はバツが悪そうに口元を突っぱねさせ近くにいた女子に耳打ちするような姿勢で

「けど織斑先生だってひどいんだぜ？初対面で俺とドクターに“怪しい二人組”なんて言っちゃってさ」

特に声の音量を下げるでもなく普通に言い放つ

すると教室からクスクスと笑い声が漏れだす

「すまないな、初対面の人間が偉いかどうかなど考える余地も無かったのだな」

「一目見て率直に抱いたイメージを言ってしまった」

してやったりといった顔で得意げに笑みをもらす千冬

「まいったな、コリヤ…でもな、一つだけ覚えといてくれ」キリッ

かつてよくやっていたように人差し指を立て1を作り急に真剣な顔つきになり千冬や真耶やクラス中に見せる伊達

「怪しいのはドクター一人で十分だから。……ネ？」ガラガラ

最初こそは真剣な顔をしていたが最後はおどけたような顔をして教室を後にする

「伊達先生…不思議な方でしたね」

「ああ、あんな風な男は久しぶり…いや、初めてかもしれないな」

「それってどういう意味ですか？」

真耶の問いに答えた千冬に不思議に思ったクラスの女子が再び問う

「いや何、社会に出る頃には天才操縦士だのブリュンヒルデだの色々な称号を身に授かっていたからな」

「気がつけば男も女も大人も子供も皆私を雲の上の存在のように扱

うものだからな、ああいった人間に会うのは初めてだといっただけだ」フフッ

「さあ、授業を始めるぞ！日直、号令をしろ」

こうして生徒たちの日常まいにちが始まってゆく。一方そのころドクタ―は…

## 電気と約束と鋭い目つき（後書き）

### 解説コーナー

今回は本作のヒロイン？織斑千冬その？です。

ヒロイン…？まあそれは置いていて、その？というのは今後絶対追加で新しく解説があると思ったので、ナンバリングしました

今回何を解説するかと言うと、ズバリ今回の話の伊達さんとのやり取りです

この話を考え出したときに、この二人は絶対に初対面でウマが合わないタイプだと思って、今回こういったトラブルを考えてみました  
僕自身は、ISの二次創作って千冬さんも東さんもオリ主かそれに準ずるキャラクターに妙に協力的すぎるなと考えているので、思い切って正面衝突させてみました

このカタブツが今後どんな風が変わっていくのか！？

今後の展開をお楽しみに！

「今回はあの真木と楯無が登場だ、胡散臭さが二倍どころか二乗だな」

いやがらせと誘惑と初授業（前書き）

早めに投稿しました

今回はドクターのターンです

それではどうぞ

## いやがらせと誘惑と初授業

始業式が終わり伊達と別れた真木、次の時間から早速講義があるため片づけが途中のままの準備室にいったん戻り指定された書類や参考書を取り足早に二年生の教室へ向かっていた

（しかし本当に私が子供相手にものを教えることになるとは…、失ったバースシステムも早く完成させなければならぬというのに悠長なことをしている暇はありません…）

自身の在り方について考えていた真木はそこではた、と足を止める

（そうですね、私には世界を美しいままに終わらせるといふ使命があったはず、この身に宿るコアメダルもその使命に応じ力を与えてくれた）

そう思い自身の体内に眠る紫のコアメダルに意識を集中させ双瞼に紫の光をともし真木、しかし反応はほんの数秒で消えもとの黒目にもどってしまふ

驚きハツと胸元を見下ろす真木、自身の異変に困惑を覚える。前の世界で感じていたコアメダルの力による胸のざわつきも消え失せている

（コアメダルが休眠状態に入っている…？あるいは一度死んだ肉体が蘇ったことでメダルが適応しきれなかったか…）

再び歩き始めながら真木は持ち前の頭脳で自己分析を始める、と、その時

「あ〜れ〜れ〜、真木所長じゃないですかあ〜!？」

底意地の悪そうな声とともにカツカツとわざと足音を荒げているかのように靴底を踏み鳴らし一人の女性が、否、後ろからは取り巻きの二人の女性が一步引いた立ち位置にいる

そう、伊達の配属先である新開室の以前の暫定管理責任者であるキーラ博士と取り巻きの女性化学者二人だ

「もうとっくにこの学園から消えたと思ったんですけど、っていうかここにいる意味が分からないんですよねえ、アンタもあのヒゲ面の男も」

「そうよ、男はここにいてるだけで悪循環なのよ!つて、ちゃんとこっち見て話聞きなさいよお」ダンッ

取り巻きの一人がヒステリックに叫び足を地面に打つ

こんなときでも真木は平然としており、相変わらず人形だけに視線を送っていた

「聞いていますよ、私も同じ科学者の端くれですから」

「アンタなんかと一緒にしてるんじゃないわよおッ!虫唾がはしるわ!」

取り巻きのもう一人が真木にくっつかかろうとするがそれをキーラが止め、今度は彼女が真木に近づく

「やめなさい、これでも上司なんだから、それなりに敬ってあげないと…ネツ！」ギユムツ！

そういつてハイヒールの踵部分で真木の爪先を勢いよく踏むキーラ  
真木はほんの一瞬顔を歪めるがすぐにもとの表情にもどり

「同業者の話はどれほどつまらなくとも一度は耳を貸すようにしています」

「しかし先ほどのあなた達の言葉は科学者としての言葉とはとても…」

嘲るように軽く鼻息をならす真木、キーラは凄まじい怒りの表情で真木を睨みつける

「上等だよテメエ…、ここに居られねえようにしてやるよ…」ピキ  
ピキ

ソバージュヘアを逆立てて体を震わすキーラ、しかしその形相は一気に緩むことになる

その原因は一つの足音であった

「あー、いたいた、見つけましたよ真木先生」

その声の主は水色のショートヘアに“搜索中”と書かれた扇子を携えた少女

そう、生徒会長更識楯無であった

「もう授業のチャイムなってますよ、うちの担任も『迷ってるかもしれないから』なんていっちゃって」

「私が探しに行く事になったんですよ、ってあれ？取り込み中でしたかあ？」

わざとらしく首をかしげる楯無、それを見たキーラは先ほど真木に向けていた形相が嘘だったかのような笑みを浮かべ

「いいえ、ごめんなさいね授業に遅れさせちゃって、大事なお仕事のお話していたの」

そういつて取り巻きを連れて去っていくキーラ、完全に見えなくなると楯無はその方向に向かってアツカンベーをしていた

「ベーっだ、何よワザとらしい、隠す気もないのに取り繕うとしちゃってさ」

キーラは自分の態度の悪さや所業の数々を表向きだけ取り繕おうとしており起こした問題は大概の生徒は既に知っている

隠す気が無いのがさらに質が悪い

なので他の生徒も別段特別な態度をとる事も無くなるべくいざいざを起こさないように過ごしている

「真木先生も気にしないでくださいね、ああいう人は一生ああいう人生を生きていくんですから」

「まあ、それでも…」

呆れたように言う楯無、だが急に含んだように破顔し真木の方を向き撫でるような声で言い放つ

「それでも耐え切れなかったらいつでも言うてくださいな、私が優しく慰めてあげますから」チラリ

スカート裾をつまみ妖艶な視線を送ってくる

まるで昨日部屋を訪れてきた生徒会長の態度とは思えない目の前の少女の雰囲気、真木は何も言おうとしない

「……………」

「……………」

楯無も無言のままだ

「……………」

「あ、あの…真顔でスルーって一番リアクションに困るんですけど……………」

「お気になさらず、私個人の問題に生徒である君に苦心していただく必要はありません」

「そ、そうですね…、あ、急がなきゃ。ホラ、行きますよ」

そういつて真木の右腕を引く楯無、だがその弾みで真木の左腕に乗

ついていた人形がポトリと落ちそのままコロリンと足元から遠くへ転がっていった

「あ、人形が…、ごめんなさい、拾ってきま…」

「は…はアツ…カハッ…ひゃい…ひゃい…ッ！」ガクッ

急にうろたえ出した真木はわなわなと身体を震わし膝を地面に着き這うように人形の方へ向かっていく

「……………プツ」クスクス

突如豹変した真木に楯無は目をパチクリとさせていたがあまりに可笑しい真木の様子に笑いを堪えられなくなり

「アハハハハハ、おつかしい！クールな印象だつて言われてた真木先生が…アツハハハハハハハ」ハアハア

弾けたように大声で笑い出す楯無をよそに無様な姿を見せてしまった真木は人形を拾い上げスタスタと去っていく

「ああ、笑いすぎておなか痛い…あ、待って下さいよー」テクテク

多々あつたがようやく楯無のクラスに到着

一歩くぐると教室内は歓声と高いテンションに包まれ一気に騒がしくなる

だが真木とて前の世界ではこんな年端も行かない少女達の何倍もハ

イテンションな男の下で働いていた経験から特にどうということもなかった

よく見ると高価そうな一眼レフのカメラをこちら向けてシャッターを切ってくる少女もいる

神経質な性格の真木としてはあまり喜ばしくない事態ではあるが、  
「昨日自分が伊達に言った“忍耐力をつける”という言葉を思い出し

ここでくだらない理由で面倒ごとを起こすと絶対に伊達に文句を言われる、そう感じた真木はしかたなく目を瞑ることにした

黒板の隅でパイプイスに腰掛けていたこのクラスの担任教師はさつきから黙りっぱなしの真木に不思議そうに見つめてくる

「ごめんなさいね、騒がしくって、男の人って珍しくて。真木先生、もしかして緊張されてるんですか？」

「いえ、では始めていきましょうか」

こうして、いよいよ真木清人の授業が始まる

「今回は…運用の『通信手段の安定活用』についての復習ですが、参考書の172Pを開いてください」

淡々と言い放つと一人の女生徒が不思議そうに手をあげて立ち上がる

「あの…それは一年の範囲で今日は設計の『空気抵抗と機体構造』の復習のハズなんですけど…」

そういつて二年生用の参考書を見せてくる

「……………ッ!!」(。(。三。))

まるで変な操り人形のように愕然とした表情で手もとの資料とその参考書を何度も何度も交互に見やる伊達

それを見兼ねた担任の教師がおそろおそろ真木に話しかける

「あの…真木先生？よろしければ指導項目と資料リストを見せて貰ってもよろしいですか？」

ハツとなった真木が目を見開いて震える手で要求されたものを恐る恐る渡す

「これは…、間違いだらけになってるわ。これをどこで受け取ったんですか？」

毅然とした態度で問いかけるとようやく平然さを取り戻した真木が静かに答える

「どこで…ですか、それは例の開発室で私宛の封筒から出したものですが」

「封に開けたような痕跡があったのでもしやとは思ったのですが…」

そう答えると担任の教師は『やっぱり…』といった表情をしていた

周りを見渡してみると大概の生徒も同じような雰囲気であった

「またあの博士だわ」 「例の新人潰しね」

「個人的な嫌がらせに生徒を巻き込むのは止めてほしいわ」 「ほんとに迷惑ね」

そんなヒソヒソ声もちらほら聞こえる

そう、新人つぶしで教師の面目を潰すのはキーラの常套手だったのだ  
こうして自分の気に入らない教師のプライドを粉々に叩き潰して追  
い出すのが彼女のやり方である

「ま、まあ気にしないで下さい。あとで私のところに来ていただければ新しい項目と資料をお渡ししますから」

「それに今回は復習だけですから、少しくらい遅れても大丈夫ですよ」

慌ててフォローに入る担任教師、そういつて自分の教科書を渡してくる

「恐れ入ります、では始めさせていただきますでしょうか」

気を取り直し授業に使うホログラム用のカートリッジを持参の資料の中から取り出し機器に接続させる

「機体というのは使用の用途に分かれ様々な形状を持っており、立体映像に移っているとおり…」

話しながら真木は旅客機やVTOL、さらには戦闘機など様々な

航空機のホログラムを起動させていくがピタリ…と手を止める

「先生！どうかしたんですか？」

「いえ、ここまで邪魔立てされて仕方なく進めていくのも気に食わないので…」

モニターのスイッチを切り

「ここからは私の流儀で進めさせていただきます」

バサリと羽織っていたコートを脱ぎ内ポケットから取り出したのは缶モードのカンドロイド

赤に紫、橙などさまざまな缶ジュースのプルタブをプシュッと開け並べる

「何？あの缶ジュース」 「見たことのないメーカーね」

「ナゾのミスティアス教師、授業中にジュースを飲む…ダメだ、記事として弱いわ」

「これで10本以上開けたわ、早飲みでもするのかしら？」

クラス的女子が再び騒ぎ出した頃、真木は教卓狭しと缶を並べ終えていた

「あの、真木先生…一体何を？」

担任の教師も何度目かわからないくらい首をかしげ真木に問いかける

「先ほども説明させていただきましたが航空機という物は用途や条件によって様々なものがあります。このように…」

パン！と手を叩くとプルタブの開いていた缶たちが一斉に形を変えあたり一面に飛び立つ

己の使命のために家族を棄て、職場を棄て、地位を棄て、果てには人間さえも棄てたグリード、真木

そんな彼がここでこんな事に己の研究成果であるカンドロイドを使うのは散々虚飯にされ、男の意地に火がついたのか

はたまた、彼の研究者根性が、授業のよりよい進め方を計算したのかは不明だが、ここでの彼は相変わらず無表情であるが、まるでどこにも見せないような顔をしていた

「タカータカー」バササツ 「クジャクー」プルプル

「プテラツ プテラツ」ギューン

見たこともない技術を目の当たりにしクラスの少女たちは目を丸くして見ている

「輸送や偵察に適した機体」そういつてタカカンドロイドを自身の人差し指に止める

「さらには一定速度を落とすことで安定した静止活動を行う機体」そういつて今度はクジャクカンドロイドを手許に寄せる

「そして新技術を搭載することで革新的な伝達速度を獲得した機体」  
最後にプテラカンドロイドを頭上でくるくる飛び回らせている

「この機体のように条件に適した構造というものが効率のよい安定した運用へと繋がるので…」

言葉半分で絶句する真木、その理由は…

「何この鳥！チョーカワイー／／」 「こつちのクジャクもカワイー！」

「一家に一台欲しい」 「うわさの新任教師、意外とかわいい物好き…うん、これも弱いなあ…」

皆突如飛び出したカンドロイドに夢中になってしまっているのだ

「ねえ、真木先生！これどこに売ってるの？」 「もしかして作ったの？」

まるで休み時間のように騒がしくなってしまった教室の空気を元に戻すべく真木は現場の静止に移る

「お静かに、ドロイドは私が作ったものですが管理を他人に委ねるものではありません」

「そんなあゝ、あたしに一匹下さい！」 「あいた！ほつぺた突つつかれたーでもカワイー」

「っていうか私に」 「いや私に」 「私に」 「私に」

「真木先生は…メカフェチで独占欲強し…、何か方向性がずれて来た…」

生徒達が皆寄ってきて真木はもみくちゃにされ、人形のキヨちゃん  
が落っこちてしまい真木は例によって悲鳴を上げてしまった

その姿に生徒達はドン引きであったそうなの…

真木清人の人生初の授業はとにかくこうして静かに、いや騒がしく  
幕を引いていった、受けはそれなりに良かったようである

## いやがらせと誘惑と初授業（後書き）

解説コーナーです

今回はもう一人の主人公？、真木清人その？！ドクター、出番だよ  
本作のドクターはテレビシリーズの38話から少しずつ分岐してお  
よそ二ヶ月後の本作の一話につながっています

じつはその間にドクターは他のグリードとすれ違いを起こし若干浮  
いた存在となっていたのです

そして伊達さんと戦ってISの世界に行ったわけです

ちなみに伊達さんは二ヶ月の間、手術と旅をしていました

詳しくはまた投稿していくので、よろしくお願いします

「次回は伊達君がまたよけいなことをする話だそうです。ではよき  
終わりを」

## 昼食と禁煙とファンレター（前書き）

最近アバレンジャーの歌をYouTubeでよく聞きます

一番好きなキャラクターはアバレキラーでした

敵に回すと厄介この上ないキャラが味方になったときの安心感は異常ですね

単純にカッコイイし！

たぶん次回の前書きでもアバレントークします（笑）

それでは第12話、始まります！

## 昼食と禁煙とファンレター

三学期最初の授業日も時間が進んでいき、先ほどの授業が終わりもう昼休みである

「ふ〜、腹減ったなあ、食堂行くか〜」

学園で唯一の男子生徒、織斑一夏は教科書の類を仕舞い込み昼食の準備を進める

「一夏〜、学食食べに行きましょう」

隣のクラスの鈴が一夏を昼食に誘いに来た、が、それにセシリア達が口を挟む

「お待ちくださいな！一夏さん、今日は私とお食事に参加しましょう」

「待て、人の嫁を勝手に連れて行くなど許さんぞ」

「一夏は貴様のものではない！」

「そつだよラウラ、ここでそれは理由にならないよ！」

「ハア……」

いつものやり取りを繰り返す少女達に思わず一夏はため息を漏らす

「篝さん達も相変わらずだね」

「三学期になってもまだやってる…、もういい加減飽きたよ」

「だねー、わたし達も学食行こっかー」

同じクラスの谷本癒子、夜竹さゆか、布仏本音の三名は教室から出ようとする

「今日は何を食べよ、キャッ！」ドンッ

「邪魔するよ〜っと、うおっ！」ドンッ

先頭にいたさゆかが教室から足を踏み出すと突如現れた伊達の厚い胸板に顔がぶつかり弾き飛ばされる

「おっ！大丈夫か？」がしっ

弾みで尻もちをつきそうになった彼女の腕を伊達の大きな掌がつかむ

「えっ、伊達先生！？何で！？あっ、私の手／＼／」

「ケガとかないな？ワリー、余所見してたわ」

「伊達先生、また来てくれたんですか！？」

「ああ、それでなんだけど、織斑ちゃん、いる？」

「織斑ちゃんって…、織斑君ならあそこに」

「そっか、あんがと！」

軽く礼を言つて伊達は教室の中程へと進んでいく

「だてせんせ、何しに来たのかな？」

「さあ？」

そして伊達は徐に一夏のほうに向かい・・・

「おゝい！」

「伊達先生！どうしたんすか？お昼だったのに」

「織斑ちゃん、メシまだだったら一緒にどうかなって思ってさ」

「男一人で窮屈してねえかと思ってな」

「男同士話してえ事とかあるし」

「それに一昨日のお礼もあるし、篠ノ之ちゃんも一緒に、な！」

「行きますッ！なァッ、行こうぜ篤！」  
「ワクワク」

IS学園に来て以来同性と滅多に食事をする機会の無くなった一夏は目の色を変えて食いつく

そんな珍しい男同士のやりとりを一部の女子は相変わらず溜息とともに目を輝かせていた

「あ、ああ、たまにはこういうのも悪くないな」ニヤリ

「OK！そんじゃ行くか！」

ほくそ笑みながらセシリア達を見る篤、女だらけで一夏を囲むより多少部外者が居ようと女は自分一人だけ、いつもより数段都合がいい展開だ

だがそれに鈴が口を挟む

「ちょ、ちよつと待ちなさいよ！先生だからって勝手に連れて行くなんて公私混同よ！」

「なっ！鈴、貴様、横やりを入れるな！これは一夏や私の問題だ！」

「いや、これは夫婦の問題だ！見ず知らずの男に預けて一夏にどんな影響を及ぼすかわからん」

「ラウラ！お前何言ってるんだよ、せつかく先生が誘ってくれたのに」

「一夏さんっ！私はこうして一夏さんとお食事を一緒にできるのをずっと楽しみにしてましたのよ！」

「そうだよ一夏！また一夏はそうやってみんなの期待を裏切って一部の人だけ喜ばせるんだから！もういい加減にしてよ！」

束になってかかってくる四人に思わずたじろぐ一夏と篤

「と、いうわけで伊達先生は今回は諦めて下さいッ！」

四人が一夏を庇うように立ちふさがる。それを目にした伊達は…

「ふ、ふふつ、あつはつはつはつは！！」

突如腹を抱え笑いだした

「あつはつはつは…ハアハア、あくおもしろえ」

変貌した伊達に目を丸くし、問いかける一夏

「あゝ、どうかしたんですか？」

「いやあく、あれだな！若いっていいなあって思ってさ、キラキラしてパワーがあつて！」

「…？どういう意味ですか？」

「後ろの娘猫ちゃん達に聞いてみな」

そういつて顎で示した一夏のそばにいた箒達五人は顔を真っ赤にして俯いている

「心配したのも杞憂だったな、俺から誘うのは野暮ってこつた」

「えつ、それじゃあ…」

「ああ、また今度にするか、ほんじゃ！」

そのまま踵を返し立ち去ろうとする伊達

「そんなあ、じゃ、じゃあれならどうです？晩飯いっしょに食べにいきましょうよ…」

「おい一夏!」「ちよつと一夏!」

少女たちが反論するも一夏は意にも介さない

「わかった、わかったよ!じゃあこれね」

そういつて伊達が渡したのは一枚のメモ

「それに部屋番とかいろいろ書いてるから、時間見計らって来てくれよ。俺が居ればの話だけどな」

「わ、わかりました!ありがとうございますッ」「ペコリ

「おい、男がそんなにペコペコ頭下げんなよ、カツコワリぞ」

「はあ」

「俺は何も君に頭下げてもらいたくて声掛けたんじゃない、我一つ押し通すのに下手にまわってちゃ疲れちまっただけだぜ」

「はい…」

「もっと胸を張れ!君はその方が似合ってる。な!」「ドン  
力強く握った拳で一夏の胸を叩く伊達

「ま、今日が無理だったらまたいつでも言ってくれよ」

今度こそ教室から立ち去る伊達、足音もメダルタンクの揺れる音も

聞こえなくなかった教室

「「「……………／／／」」」ポ

「伊達先生……」

「威風堂々としてらして素敵だわ／／」

「なんか頼れる兄貴分って感じよね」

この学園の数少ない男、伊達明に相変わらずクラスの女子は目をキラキラさせている

「伊達先生×織斑君！燃えてきたわ！」

一部例外もあるが……

「……………」

伊達が自分に“男”として投げかけてきた言葉は一夏にしっかりと届いていた

「一夏！」

「わあっ！なんだよシャル」

「なんだじゃないよ！どうして一夏はそうやっていつもいつも……」  
ブツブツ

シャルロットが怒りながら何かボソボソ言っているが一夏にはよく

聞こえない

「と・に・か・く！早く行きますわよ！」

「そうよ！お昼食べ損ねたらアンタのせいだからね」

「うむ、時間は貴重だな」

（これがほんとの“膳は急げ”ってやつだな）

「い〜ち〜か〜」ゴゴゴゴ

「な、何だよ箒、そんな険しい顔して…」

「せっかくのチャンスをふいにしたのに、またお前は下らない事を考えているんだな」ゴゴゴゴ

背後からオーラを立ち昇らせる箒、どこから取り出したのか手には竹刀が握られていた

「ちょ、ちょっと待て箒、一つ聞いておきたいことがあるんだ」キリッ

「な、何だあらたまって／＼」ドキッ

「箒…」ジー

「一夏…」ドキドキ

急に温度差が激しくなった教室の空気に周囲の生徒も静かに見守っ

ている

「……この教室に猫っているのか」

「……は？」

「いやさ、さっき伊達先生が言ってたじゃん、子猫ちゃんに聞けて」

「でも猫って喋れない筈だよな…、どういう意味だったんだ？」

「……………」ブルブル

「どうした筈？トイレか？」

「……………貴様は……………」ユラッ

「何だよ、急に竹刀を振りかぶって…」

「貴様という男は！」ブンッ

何かが俺の頭にぶつかった音と凄まじい衝撃を最後に俺は気を失ってしまった

俺が気を失っている間にどうやら皆は勝手に食堂に食べに行ってしまったようだ

クソッ、こんなことなら伊達先生とメシ食いに行けば良かったぜ

俺が目を覚ました頃には次の授業が始まっていた、そう、俺は昼飯

を食べ損ねてしまったのだった

けどまさか、俺がいない食堂であんなことが起きていたなんて…

　　↳ 遡ること数分前、食堂・職員用席にて

まだ授業は終わっておらずこの時間に仕事が無かった真木は早めに食堂に来ることになった

「おお、ドクター先に来てたのか」

「私もちょうど今着いたところです」

「そっか。いや、例の唯一の男子生徒誘おうと思ったんだけど、ドクター誘った手前それじゃカッコつかないと思ってさ」

「そうですか、君が行けばまた何か厄介事でも起こし兼ねないと思いますかね」

「言ってくれるねドクターも、そうだこれ見てくれよ」バサッ

伊達がテーブルの上に広げたのは可愛らしいマークのついた便箋やイラストの入ったハガキ等

顔を近づけると甘い香りが漂ってくるようなまさに華の女子高生という表現がピッタリのアイテムでいっぱいになっていたポケットから取り出されたのだ

「も〜廊下歩いてるだけで貰うわ保健室戻ればおばあちゃん先生が預かってるわで大変なんだって〜」

心の底から嬉しそうに話す伊達、人の好意に素直に触れるのはやはり気持ちいいものだ

内ポケットから煙草を取り出し火を灯し喫煙をたしなむ

「どーよ！この量、これはあれだな！俺の人徳の成せる技だな」

肺に煙を入れ会話にも熱が入り饒舌になる伊達

「で、ドクターは？あ、無い？まーそんなこともあるって」「ニヤニヤ

真木に喋る暇を与えずガンガン喋っていく…ところが

「…………伊達君」チヨイチヨイ

真木が指差した先には段ボール箱が椅子のそばに置いていた

「何だよその箱…………ツ！？」ギョッ

段ボールの中には自分が受け取った何倍もありそうな手紙や便箋が入っていた

「人徳ですか…、両手いっぱいくらいの絵手紙数通で人徳ですか。それはそれは大したものですな」

実際に教壇に立つという違いもあるのだろうが、自分とあまりにも量に差がありすぎる

「こんな意味のない紙きれに一喜一憂して、本来の私たちの使命を

「忘れているのでは無いですか？」

「忘れてなんかいねえよ、それに何だよ！意味がねえって」

「言った通りの意味ですよ、いずれこの世界から消える我々には至極不必要な代物でしょう」

「不必要なんかじゃねえ、きつと分るさ。分らせてやる、俺が！」

力強く言い放つとそのまま立ち上がりその場を出て行くこととする

「だったらこうしちゃいらねえ、生徒呼んできてやるって」

「騒がしいのは得意では無いのですが」

「そう言うなって！やっぱ例の子誘ってみるわ。ドクターもその手紙達、ちゃんとよく見てみたら？」

言うつや否や加えていた煙草を携帯灰皿に仕舞い込み足早に去っていく

それと同時に昼休みを告げるチャイムがスピーカーから鳴り響く

「不必要ではない…ですか…」

「ず〜っと続くからいいんじゃないの？」

「自分が死んだ後も何か残る？」

ふと伊達の言葉を思い出す

く残れば醜い残骸です。美しいうちに終わらせなければく

思い出す伊達とのやりとり

あの時、私は彼の戦力を確かに欲していた

それは勢力の統一のために私の作ったバースを手中に収めるという理由

くそうでなければ本当に協力してほしかったく

コアメダルの力も無くしてしまった私に残ったのは僅かばかりの発明品、そして幼いころから人格のかわりに要求され続けてきた“優秀な才覚”

使命を果たせなくなった私が残すもの…

そうして真木はおもむろに段ボールの中から一通の便箋をとりだす中を開けてみるそこにあるのはとゴテゴテした色遣いのペンで書かれたような文面

次に出したレターセットにはご丁寧にキヨちゃんの絵が描かれていた

こうして一通一通に軽くだが目を通していく

確かに財団から送られていた催促状や謝礼文のように堅苦しさや誠実さとはかけ離れたものではあったが

眼前に広がる手紙達には煌めく生きた想いが感じ取れる

「…等と、社交辞令にもならない奇麗事を言ってみても始まりませんが」

「俺達まだ生きてるってことだよな、儲けもんだ」

「終わりそこなったのが“儲けもの”ですか、全く君らしい」

「一通り目を通し終わると手紙達を箱の中に仕舞い込む」

ふと周りを見渡してみると授業を終えた女生徒がちらほらと入ってくる

相変わらず周りがザワザワと騒がしい

おまけに何人が真木の方へ寄ってきた

最後に授業をした教室で見かけた女生徒だ

「真木先生、ご飯まだなんですか？」

「私たちと一緒に食べませんか？」

「ちょうど授業で聞きたかったところもあるんですよ！」

改めて思うがこういった空気は初めてだ、騒がしいのも苦手だし観察されるのも苦手である

「申し訳ありませんが私は伊達君と待ち合わせておりますので、御遠慮頂きたいのですが、…それに」

真木が目線を移した先にはあの女、相変わらず偉そうに取り巻きを  
引き連れたキーラが忌々しそうな目で真木を睨みつけていた

「コソコソしないで君も言いたいことがあるならばハッキリ言った  
らどうぞです」

パニックした時しか声を荒げない真木が珍しく声を大きくして喋りか  
けている

「チツ！」ガタツ

キーラは不機嫌そうに舌打ちを打つと椅子から立ち上がり真木の方  
に近づいてくる

真木は周りにいた女生徒達に離れているよう目で指示を送る、女生  
徒もそれを察して足早に二つ程先のテーブルに移る

周囲に険悪な空気が広がる

そして今、その頃伊達は…

「いやぁー、面白いのなんのって！まさかあんなにモテてるなんて  
ね！」

「ですよねー、一人だけの男子ですからね、ああなってもおかしく  
は無い気もするんですけどねー」

「もう何ヶ月もあのままなんですよー」

「おりむーモテモテ」

結局出会い頭にぶつかったのほほんさん達3人組と一緒に昼食に行くことにした

「けどよかったよ、ドクターが思いのほか評判よくって」

「あの絶対第一印象で誤解されるタイプだと思ったからさあ」

「アハハッ実はあたし…最初見たときちょっと変な人だと思っちゃいました」

「あの人形もちよつとね…、うちのクラスじゃ断然伊達先生派ですよ！」

「私も伊達先生派です！」

「そお、嬉しいこと言ってくれるねえ」

「本音は真木先生派なんだよねー」

「布仏ちゃんはアレか？ちよつと影のある大人が好みなのか？」

「う、うん。えへへ」

「でも他のクラスで急に真木先生の株が急上昇してきたみたいなんですよ」

「なんでも授業にロボットを使ってるとかで！すつごく説明もわかりやすいとか」

「すつごくカワイイって言ってた〜」

「へえー、ドクターも何だかんだ言ってノリノリだな」

ふと伊達の頭の中で教鞭を奮う真木の姿が浮かんでくる

(似合わねえ〜、似合わないにも程があんだろ) プププ

伊達は口角を上げ肩を震わせ彼女たちから見えないように笑う

(けど、案外ドクターも馴染んでるみたいだな…、もともと天才だなんて言われてたからこういう才能もあって当たり前だったのかもしれねえな)

笑ったかと思うと今度はしんみりだし

(出会い方とかめぐり合いとか、そういうのが一つ違えば前の世界であんな事にならずにすんだのかもな)

「もっと早く、出会えてたら…か」ゴソゴソ

伊達は呟きながら内ポケットからタバコを取り出し器用に歩きながらライターの火を口元に近づける

「先生、ここ禁煙だよ？」

「マジでか!？」

「ていうか校舎内は全面禁煙ですよ」

「な、なんだって！」

「学校なんだから当たり前じゃ〜ん」

「そ。そりゃそうか…」

少女達のトリプルパンチを浴びせられガツクリと頂垂れる伊達

「でも吸わない方が体に良いって言いますし」

「息も綺麗になるんだよ〜」

フォローは一応受けたがションボリとした顔の伊達

「まあまあ、美味しいもの食べて元気出しましょう」

「ほら、もうすぐですから！」

確かに食堂はもうすぐだ

だがどこか様子がおかしい。入り口には食事に来たと思しき千冬と真耶が立って中を見ていた

## 昼食と禁煙とファンレター（後書き）

解説コーナーです

食堂は学年別にあつたような気もしますが気のせいにしておいでください（笑）

食事の空間ってすごい存在感が生まれると思うんですね

ほら、アバレンジャーでも恐竜やは登場人物の憩いの場として登場して

以降のVSシリーズでも何度か出てきましたしね

イカン、脱線した

てな訳で、食堂の意義は広めです。ではまた次回

## 意地と疑惑と出遅れた男（前書き）

前回に続きアバレントークです

何でアバレキラーが好きなのか考えてみるとそれはやはり悪としての振る舞いがどうにも人間臭いところがあつたからだと思います

昔大好きだった悪のライダーの代名詞である王蛇や最近だとエターナルなんかは最早人間を超えた存在であるかのように表現されていて、ガキの頃はそういう妥協のなさや悪い意味での割り切つたような性格がどこかつかつこよく見えていたのかもしれない

ですが年をとつて人間の観察の仕方が上手くなるにつれ、そういった悪に美德を感じることにどこかむなしさを感じたのかもしれない

長くなりましたね（^^）

では第13話はじまります

## 意地と疑惑と出遅れた男

「山ちゃん先生に織斑先生、どうかしたの？」

「あ、伊達先生！大変です、真木先生が…」アタフタ

「ハア、全く…」ヤレヤレ

真耶は慌てながら伊達の方へ寄ってくる、千冬はその場に立つたま溜息をつく

「どうしたってのよ、ドクターが…」

入り口から中を覗くと真木が白衣を着た研究者風の女性にしつこく絡まれている

食堂の中には生徒も大勢いるが険悪な空気のせいであれも言葉を発せられる状況では無くなっている

「あれが前に言ってた例の女科学者が…、なんで取り巻きの一人はコーヒーポット持ったまま後ろついて行ってんだ？」

「いつもあんな感じなんですよ、コーヒーメーカー一人占め…あ、この場合は三人占めですけど」

同僚に対する態度が悪いキーラは食堂でのマナーも十分悪かった

揉めてるのは火を見るより明らかだが場所が遠すぎて何を言ってるのか全く聞こえない

「ちつきしよく、面白そうなシーンなのに何言ってるか全然聞こえねえじゃねーか」

「面白がってる場合じゃありません！とにかく止めないと…」

「まあ待つんだ、山田先生」

「何ですか！このままじゃ…」

今にも飛び出しそうな真耶を千冬が制止する

「そうそう、織斑先生の言う通りだって。黙って見てましょーや」

「伊達先生まで…」

傍にあったベンチソファに腰かけ真耶を嗜める伊達

「ドクターに任せようってこと、ここじゃ他の人が多いから横槍入れんのは簡単だけだよ」

「そうしまったらあの姉ちゃんたちはドクターのこと“泣き寝入りして他人任せにしちまう奴”って思いこんじまうだろ」

「あ、確かに！」

「だとしたらさ、ここでドクターにビシッと行ってもらおうってハ  
ラよ」

「おー、伊達せんせーあたまいー」

(調子のいい事言っちゃったけど、大丈夫だよな…ドクター)

空気が凍りついた食堂で真木は座ったまま左手の人形に視線を送るこの女が私の席に近づいてきて感じたこと、まずは息苦しさ、そして不快感

思わず啖呵をきってしまった今ではそんな自分さえも煩わしく思う

今ほどこの巡りあわせを謀ったあの鳴滝という男を恨んだことは無い

「私が気に入らないのは勝手ですが、生徒にまで被害を撒き散らすような行動はやめていただきたいのですが」

「へッ、科学者のくせにポーズ気にしてんの？大事だもんね〜メンツって、今の世の中で男が上に立つ仕事なんてそうそうないからね」

「ご立派だね、その教育理念、是非見習いたいもんだわ」

目に悪い色のフレームのメガネをかけた取り巻きの一人が真木に皮肉を言うってくる

「どうせテメーもここまでイロんなことやらかしてきたんだろーが、今更いい子ちゃんぶってんじゃねーよ」コポポ

キーラの取り巻きの一人はキーラのコーヒーカップにコーヒーを注ぐ

「ちょっと待てよ、あんた生意気なモン持ってるじゃない」

そういつて机の上の手紙をいくつか掴み取るキーラ

「結構女々しいところあるんだ、ねえ、気持ち悪すぎんだろデメエ」  
掃き捨てるように口汚く罵るキーラ

「あーキモイキモイ、キモすぎるわ」

「君にとやかく言われる筋合いはありません」

「勝手に決め付けてんじゃねえよ、上司がこんなキモいやつだった  
ら職場の士気が下がるって言うてんだよ！」

「だよねえ、空気が腐るよねえ。よし、厄除けしてやるっか」

言うや否やキーラはなんと注がれたばかりの湯気が立っているコー  
ヒーを傾け、なんと手紙が入った箱にぶちまけた

真木のメガネレンズには落ちて行くコーヒーがスローモーションの  
ように映る

気に入らない、拒絶したい、排除したい

げに恐ろしきは人間の欲望か、見苦しいものだ

こんな薄汚い欲望を食<sup>もの</sup>い物にしないと生きていけないグリードとは  
なんと哀れな生き物だったのか

そんな生き物にこの身を墮落していたとは

そしてそれを見ていただけだった真木はおもむろに右手を上げ…

キーラの暴挙は入り口で見ていた伊達達にも見えていた

誰しもがキーラの悪行に目を伏せようとする、数秒後には見る影も無くなった汚れた紙屑に変わってしまう事が安易に想像できたからだ

だが…

「ドクター…」

事実は違った

「……………ッ！」

「……………テ、テメエ」

真木は落下するコーヒーが箱の中に入る直前に自分の右手を突きだし直撃を免れていた

だがその代償として上着の右手の袖から肘にかけてコーヒーがかかっってしまった

袖からは湯気が立ち上っており見るからに痛々しい

「……………」

完全に食堂内は沈黙の場と化した、否、憤っている者もいるが…

「もう我慢できません！私ちよつと言ってきます…！」

「まあ待つてつて!」ガシッ

憤りを隠せない真耶がいきり立って食堂に入ろうとするが座ったままの伊達が手をつかんで静止させる

「言ったつしよ、これはドクターの真剣勝負でもあるんだって!」

「ですけど…」

「ドクターがただの怪しいオッサンじゃないって、証明してくれるから!」

「はい…」

「」「」「……」「」「」

騒ぐ真耶と伊達をよそに千冬や本音達は静かに事が過ぎ行くのを待っていた

そしてキーラはといえば真木の予想外の妨害に冷静さを保ちながらも怒り心頭していた

「何のマネだよテムエ…、いい子ちゃんぶるのもいい加減に!」イライラ

真木はその場で立ち上がり右手の袖を捲くる

「これだけやってまだわかりませんか?」

「…どういう意味だテメエ！」

「先ほど君達に会ったときにこういった筈です、科学者としてはとても…、と」

「それがどうしたつつつんだよ！」

取り巻きの一人も語気を荒げ怒鳴る

「あれは役職に対して君たちに模範的な範囲の評価を伝えたつもりでしたが、仮にも生徒への心証を害するような行為に平気な顔で及ぶようでしたら」

「……………ダメレよ……………」ハアハア

「もはや科学者としてではなくきょ」

「黙れって言うてんだよオツ！！！！！！」

ガツ　　バツツツシャアア

真木の言葉に我を忘れたように怒り狂ったキーラは取り巻きの持っていたコーヒーポットを奪いその中身を真木に勢いよく振りかけた

「キヤアアア」　「ひどい……………」

辺りの女生徒から悲鳴や憐みの声が聞こえてくる

コーヒーが直撃した真木は後ろに数歩よろけるも体勢を立て直すのが、左手の人形のキヨちゃんにもしっかりとかかってしまい

真木は再びパニックに陥ってしまった

「…ああああ…ひいいい……ほああ〜」ジタバタ

体から湯気をあげ、尻餅をついて身を擦じらせる真木の姿は最早立派な？被害者だ

「ハアハア、胸糞悪いんだよ！そうやって一生被害者面してんのがお似合いなんだよ teme は！」

「ちよつと待つてください！」

キーラが声のした方を向くとそこにはとうとう見兼ねて出てきてしまった真耶がいた

「山田先生、何か用ですか、今大事なお仕事の話をしていたところなので、聞かれると面倒なんですけどお」

「ふざけるのもいい加減にしてください」

相変わらず食堂の入り口で見ていた伊達達は大いに焦っていた

「はわ〜、山田先生行っちゃった〜」

「全く、次から次に厄介ごとを起こしてくれるな」ハア

「ああ〜もう！面倒なことしてくれちゃって！」

「仕方ないな、私が行くしか…」

「ああ、いいからいいから！俺が行きますから、織斑先生はここでドサ

いうや否や伊達はメダルタンクを地面に置きテクテクと歩いて行ってしまった

「さっきから見ていたら乱暴な真似ばかりして、生徒が見てるんですよ！恥ずかしくないんですか！？」

すごい剣幕で怒りたてる真耶、キーラはそれを右から左へ受け流すようにまるで気にしていない

「だあかあああ、これは研究者同士の問題だって言ってるんだろ！関係ないんだから引っこんでろ」

「そんな風には全く見えません！もうすこし教育者としての自信とひん」

「うるっせえんだよ！ブリュンヒルデの犬が！」カッ

「……………ッ！」ビクッ

急に凄い剣幕になったキーラの凄みに真耶は思わず後ずさる

「どおせオマエも結局いい子ちゃんぶってるだけなんだろ！」

「同僚に嫌われたくねえ、生徒にも嫌われたくねえ、だから誰かの顔色窺っていつもヘラヘラしてんだろ」

「そんなだから代表候補生どまりなんだよ！言われたことしかできねえメス犬が、うすみつともなく吠えんな！」

標的を真耶に変えたキーラは凄まじい勢いで罵っていく

真耶は全く反論出来ない自分が情けないのか両目に涙を溜め震えている

だが、

「うすみつともないのはあんた達の方じゃないの？」

「アアン!？」

キーラの取り巻きがなるように大声を出す、その先に居たのは伊達だった

「俺小難しい話はよく分かんねえけどさ、山ちゃん先生が頑張ってるのは誰かの目に映ってる自分のためじゃないってのは見てて分かるよ」

「何言ってるんだ、テメエ」

「ちゃんと分かって相手の事駄目だししてんのかって事、山ちゃん先生は本当に大事だから相手の事尊重して、時には頑張りすぎちゃうんだ」

「二番手に甘んじるその意味をちゃんとわかってる山ちゃん先生捕まえて顔色窺ってるなんて、お前らの目曇ってんじゃないのか！」

ビシツと言いつつ伊達、いつしか真耶は両頬をポツと赤く染めていた

「……………伊達先生／＼／」

「ったくも、ドクターもだらしねんだから、オラ！シャンとしろ」バシツ

「ハツ」(。(。三。)( )

伊達に檄をとばされ我に返る真木

「ほら、さっさとこれで顔拭けよ」サツ

伊達が差し出した布巾で真木の顔を拭く

だが真木はそれに顔を険しくさせる

「伊達君、それは雑巾です」

「お？そうか、ワリーワリー、ハハハ」

「……………プツ」クスクス

「……………アハハハハハハ」……」

真耶が吹き出したのを皮切りに食堂内が笑いに包まれる

だがそれを当たり前のようによく思わない者が……

「おいてめえら……、何勝手に盛り上がってんだ……」

「話はまだ終わってねえんだぞ！」

キーラとその取り巻きが相も変わらず大声でがなる

「何だよ、まだやる気かよ、懲りねえなあんだ達も」

「真木先生も何とか言ってください！」

真耶に急かされる形で真木に振られるが、ペースを取り戻した真木は毅然とした態度で

「もうこれ以上話すこともないでしょう。それに」

「それに？」

「これ以上揉め事をおこして君たちの食事の時間を台無しにしてしまっほうが私にとって余程心苦しい」

「んマアッ！」

伊達が感嘆の声を上げると真木は持ってきたものを片付けだし

「それでは私はこれで、次の授業の準備もありますので」

そう言って真木は食堂の入り口のほうへ戻っていく

「……ドクター、男だぜ！！」グッ

真木にサムズアップを送る伊達にバツを悪くしたキーラ達は荒々し

く真木とは逆の方向に出て行った

「ま、これで一件落着ってとこかな？」

「みたいですね…、あ、ありがとうございます。助け舟出していたでいて…」

「ん？気にしない気にしない。とーぜんのこといったまでだから。ネッ」

「はい…、うふふ」

「そゆこと！ はは」

この一件はまたしても即座に学園中に知れ渡ることになった

伊達の男気や真木の奇癖などが…

かに見えたが、語られないことも起きていた

食堂から真木が出てきた所には千冬にのほほんさん達三人組がいた

出て行こうとする真木にのほほんさん達は黙って見送っていた

だが荷物を抱えて視界の悪かった真木の足が置きっ放しだった伊達のメダルタンクにぶつかる

ぶつかった拍子に真木はよろけ、タンクは倒れて中身がこぼれてしまった

ザラザラザラ〜

「真木せんせ〜、大丈夫〜？」

「ええ、少々視界が悪かったただけですので」

「このミルク缶の中のこれって…、もしかして」

（知っているのでしょうか？ それともこの世界にもメダルのシステムは存在しているというのですか…）

唐突に質問をふってきた癒子に真木はタンクをうっかり倒してしまった自分の軽率さを恨んだ

「これって海外のお金とかですか？伊達先生海外に長い間居たって聞きましたし」キラキラ

目を輝かせながら問いかけてくる少女に真木は辟易しながらも

「どうでしょうか…、私には分かり兼ねます。後、伊達君はその中身を人に見られるのを嫌がりますので、今日見たことは内密にしておいたほうがよいでしょう」

（やはり私の杞憂でしたか…、まあそうでしょうね）

「わ、わかりました…」コクン

頭を縦に振る癒子の後ろでのほほんさんとさゆかがメダルをタンクにしまい終えて元の位置に戻す

真木の話は後ろの二人にもちゃんと聞こえていたようである

「それでは私はこれで、午後の授業の時間にくれぐれも注意してください」スタスタ

そのまま歩いて去っていつてしまう真木、そんな真木にもひとつ見落としているいる物があった

（今のはまさか…、いや、そんなはずはない。“アレ”がこの世界にあるはずがない、あんな忌々しいものが…）

メダルタンクを倒した一件に千冬が加わっていたことを真木は見落としていたのだった

そして真木は気づかなかった、こぼれるメダルを目の当たりにした千冬が思案げにそれを見つめていたことを…

そして時間は今！というより放課後！

「まさかそんなことになっていたとはな…」

「そう、大変だったんだよ！大騒ぎになって！」

一夏は放課後の教室でシャルロットから話を聞いていた

シャルロットは箒たちと食堂に向かいあの一件を出口側から見たそうだった

「けどやっぱり伊達先生はカッコいいなあ、体でかくて男らしいし！」

「そこ！？相変わらず一夏は一夏なんだね……」ハア

恋する乙女シャルロット、彼女の恋路はまだまだ長くて遠い

「そっだ、伊達先生に部屋番預かったんだっただ、一緒に晩飯行かないか？」

「え、一緒に！？う、うん行くよ、絶対行く！（やった、チャンス）」

「じゃあ食堂行く時間になったら、また電話いれるよ」

「わかった、お願いね、一夏」

こうして一夏とシャルロットは夕食の時間に会う約束を取り付けたのだった

## 意地と疑惑と出遅れた男（後書き）

今回の解説コーナー テーマは“罵倒”

今回、登場人物の一部が激しくエレクトしてしまいお目汚ししてしまいました

キラ博士については今後の解説で補足させていただきますが、それにしても今回は特にひどかった（汗）  
ま、こういう人だということでは…

後、伊達さんのキレ方（怒り方）ってこんな感じによかったかな

ドクターの怒ったところは想像できません（笑）

そんなわけで次回もお楽しみに

「キャラクターには平等に愛を以って書いております」

## インタビューと煙草と新たな力（前書き）

これが14話目です

都合によりSS速報VIPさんに掲載している分と並んでしまいました

ご了承ください

## インタビューと煙草と新たな力

待ち合わせしていた時間になり、一夏はシャルロットと食事に向かうことにした

その前に伊達を誘いに行くのだが…

「よく考えたら職員寮って来るの初めてだな」

「織斑先生は寮長室だもんね、それにしても静かだね…」

さすがにいい年した大人が部屋から出てワイワイ騒いでるはずもなく寮の廊下は空調の音しか聞こえなかった

「え〜っと…、このへんかな？あれ？こっちか？」

「職員寮って複雑だね、入り組んでて」

「あ、ここだここだ」

少々迷ったが無事に伊達の部屋へたどり着く二人

ピンポン

呼び鈴の気の抜けた後にプツツと相手と連絡が繋がった音が鳴る

『はい、あなたの伊達明です』キリッ

ガクッ

「一夏とシャルロットは思わずずっとこけそうになる

「伊達先生、何言ってるんですか！俺です、織斑です」

『おお、織斑ちゃんね！まさか渡した初日に早速やってくるとは…』

「あ、迷惑でしたか？」

『いや、そんなこと無いよ。とにかく開けるから入ってよ』

ガチャ

「開いた…、けど先生居ないね」

「ん？なんだこのオモチャ」

「ウホツ　　ウホツ」クルクル

「一夏とシャルロットの足元で掌ほどの大きさのゴリラのようなおもちゃが目を光らせ腕をクルクル回していた

「一夏はそれを拾い上げまじまじと見つめる

「お前が開けてくれたのか、ありがとな！」

「これが例のロボットかな？よく出来てるね」

そのロボットは一夏の掌の上で何度かピョンピョンと跳ねる

そして目を点滅させスピーカーから声が発される

『悪いんだけど今シャワー浴びててさ、リンスとってくんね?』

「リンス? ああ、これですね」

『おお、サンキュー 洗面所はカギ開いてるから』

「わかりましたー、」ピタ

洗面所の引き戸の取っ手に差し出した手を止める

「どうしたの?」夏

「いや、ドア開けたら伊達先生が女だったらどうしようって思ってた」

「ああ、前にもそんなことあったよね。アハハハ」

「ハハハハ」

「い〜ち〜か〜」ギョムムム

「い、いふあいいいふあい」ジタバタ

「下らないジョーク言ってる暇あったら早く渡してくる!」

「わ、わかったよ」ワタワタ

「夏が慌てながらドアを開け中に入る」

それをシャルロットは顔を真っ赤にして見守りながら呟いた

「…一夏のえっち」

その後、シャワー室からあがった伊達がパンツ一枚で部屋に戻ってきて

それを目の当たりにしたシャルロットが悲鳴を上げたり

その瞬間を伊達に言伝があった真耶が部屋に入ってきて際にバツチり見られ顔から水蒸気爆発を起こされたり紆余曲折あったが

とうとう一夏が待ちに待っていた夕食の時間

三人は食堂の丸テーブルに腰をおろしている

一夏と伊達は気が合ったようで談笑している

シャルロットの紹介もそこに三人は食事をとる

シャルロットは男同士の会話になかなかついていけなかったようだが心の底から楽しそうな一夏を見て満足そうだ

(一夏…うれしそうだね。やっぱり男の人がいると違うんだな…)

そんな和やかな雰囲気が続く中、そんな空気を払拭する人物がやってくる

バタバタ ガチャン

「あ！いたいた、探しましたよ伊達先生！」

「？」

突然の来訪者は首からカメラを提げた赤い髪の少女だった

「先輩！もしかして…！」

「あ、織斑君も一緒だったのね、ちょうどよかったわ」

「誰だい君は？」

「どうも、新聞部です、取材に来ました」

「取材イ？」

「はい、新しく入ってきた先生の取材で伺いました」

「あ、伊達先生、この人は新聞部の…！」

「申し遅れました、薫子っていいです。宜しくお願いしますッ！」

挨拶をしてきた少女に面喰ってしまう伊達だった

「取材！？ 取材って…俺何か悪いことしたかな？」

「違いますよ！ 新学期に新しく入ってきた先生、これは特ダネなんですから！ってな訳で、さっそくインタビューはじめます」

「元気な娘だなあ、いいよ何でも聞いてよ。まあ全部答えられるかはわかんないけどね」

「それじゃ基本的なプロフィールをお願いします」

食堂にいたその他の生徒達もインタビューに耳を傾ける

「え〜っと、伊達明、三十路です…好きな食べ物はおでん…あ、ちなみにカツオ出汁派です」

「おでん…ね！良い情報押さえたわ！」 「どこのメーカーの一番出汁が美味しかったかしら」

周囲がザワザワと騒ぎ始める

「この女の子ってのはどお〜も噂話が大好きみたいだねえ」

「そりゃそうですよ、男の人は数少ないですから」

（まるで離島の小学校の先生みたいなセリフだな…、ここも島の上だからあながち間違いないけど）

「私は昆布出汁派なんですけどね、それじゃ配属前のお仕事なんか教えてもらえますか」

「んあ、ああ、え〜っと、挨拶でも言ったけど外国で医療支援してたんだ」

「その後は…、化け物退治を少々…」

「その時のエピソードを一つ、お願いします」

「エピソードって…、そうだなあ、ちょっと前にいった国…、内戦  
続いている国なんだけど」

「……………」ゴクリ

急に重い話になりインタビューしていた薫子の顔にも真剣さがにじ  
み出る

「その国のとある地区の廃寺に設営キャンプ敷いてたんだけど、そ  
こにどーもひねくれたガキがいてね」

「いや、こっちは普通に接してたんだぜ、なのに『医者嫌い！』  
とか言ってるさ、支援物資も食料も受け取らないんだ」

「まあ詳しく話せばややこしくなるんだけど、紛争で両親をなくし  
て妹と二人暮らしの男の子がいたわけよ、君らと変わらねえくらい  
の歳だったと思うんだけど」

しみじみと語りだす伊達、薫子はレコーダーのマイクを向け録音し  
ながらメモにさらさらとペンを走らせていた

「なるほど、“土地に人あり”ですね」

「へへ、良い事言っね」

「あ、続きをどうぞ」

「まあそれでも戦火ってやつは容赦なく降り注いでくる、執拗に、

そして気まぐれにな」

「けっこーきつかったぜ、銃持って戦ったり下水道逃げ回ったりな」

「大変だったんですね、それでその子供たちはどうなったんですか？」

「無事だったよ、一悶着あったけど」

「それでさ、撤退命令が出てそのまま帰国になったんだ、忙しいだろ？」

「はあ…、そういうお話なんですか？」

「違う違う、でな、その子供がさ、別れ際に初めてありがとうって言うてくれたんだ」

「それから『俺もアキラみたいな医者になりたい』って言うてくれてさ、あんときは嬉しかったねえ」

メモにペンを走らせていた薫子はふつと顔を上げ

「へえ、“人に歴史あり”ですね」

「そういうことだ」

「なるほどなるほど、良い記事が書けそうです。じゃあ最後に！」

ピシッと人差し指を立てる薫子

「教師として、何か抱負を一言、スローガンでも構いませんよ」

「抱負ね…、うーん、ここは軍の養成学校なんだっけ？」

「詳しく説明すると面倒なんですけど、大まかにいえばそんなもんです」

「そうか…、俺も面倒な話は得意じゃないんだが、一言だけいうなら」

「何のための兵器かって、考えてみてほしいってことかな」

「と、いいますと…」

「おれは世界中を回っているんなものを見てきた」

「今まで俺は自分一人で生きていけると勝手に思い込んでた」

「ま、あながち間違いじゃないけどさ、それでも…」

「それでも…?」

「差し伸べてくれる手の暖かさってのは、ケツコ 忘れられないものだよ」

「だからさ、この学校の事はよく分からないけど、あんまり閉塞的にならずにさ」

「武器を握るだけじゃ無い、誰かに差し伸べる為の手を忘れないでほしいんだ」

「へへッ、何か照れ臭いな」

「いえ、なかなか含蓄があつてよかったですよ」

「でも先生、あまり私たちを見くびらないで下さいね」

「へ？どゆこと？」

「先生が思っているほどこの学園は切羽詰まったところじゃないつて事です」

「ね！織斑君！」

「ああ、俺たちはそんな一人で閉じこもっちまうなんてこと無いぜ」

「そっか、それは恐れ入った！」

かるく頭を搔く伊達

「まあ、そんならいいけど」「ゴソゴソ」

伊達は躊躇なくタバコを内ポケットから取り出し啜える

「そついやドクターんところはいったの？」「シュボッ

「いえ、一筋縄では行きそつにないのでもう少し間をおいてから行こうと思います」

あっけらかんと答える薫子

「ハハ、そりゃいい。どんなところが一筋縄じゃないんだ？」トントン

伊達はタバコの灰を携帯灰皿に落とし啜えなおしながら問いかける

「うーん？人間離れたら雰囲気でしょうかね」

「ハハハハ！本人知ったらショック受けるだろうね、“無表情”で！」

「アハハハハハハハハハ」

堰を切ったように笑いあう二人、案外気が合うようだ

「けどドクターが人間離れしてる、ねえ……」グシグシ

携帯灰皿にタバコを押しこみ火を消す伊達

「俺に言わせりゃあんな人間臭い人もそうそういねえと思うけどな」

「長いお付き合いなんですか？」

横から聞いていたシャルロットが口をはさむ

「あゝ、どうなんだろうなあ……、所謂あれだな、一瞬より短いけど永遠より長いってやつかな。そんなもんだ」

「よくわからないです」

「ハハハ、その内わかるさ」フウ

二本目のタバコの煙を吐き出し俯き気に笑う伊達

（何かただの知り合いって雰囲気じゃないな…）

推察する一夏をよそに伊達はタバコの箱を置き茶を啜っていた

「ま、この意味が分かれば立派な大人ってことだ、俺みたいにな…な！？」スカツ

伊達が机の上のタバコを取ろうとするが眼前で突如箱が消えた

「あれ？俺のタバコちゃんが…」キョロキョロ

「探しものはこれか？」

慌てる伊達に話しかけるのは何と千冬であった

「まったく…、生徒の前で堂々と喫煙とは…」グシヤリ

持っていたタバコの箱を残りごと握りつぶした千冬

「あれ、もしかして駄目だったのかな…なんて」

目を泳がせて場を濁す伊達、その眼は“の”の字になっていた

「駄目に決まっているだろう！馬鹿者が！」

ガ  
ン

「ば、ば、ば、ば、ば、ば、か、も、の」ガクーン

膝をつき絶句する伊達、暗いオーラを纏っているのが目に見えて分かる

「と、年下の女に馬鹿って言われた…」

もしかしたらテンションの下がりようは真木以上かもしれない

「伊達先生…」

「その辺はナイーブなんだな、伊達先生」

「激写！伊達先生の新たな一面！」

「織斑先生をつかまえて年下の女…、深いわ！伊達先生」

各々の反応を示すなか、入口からタカカンドロイドが背中にはツタカンドロイドを乗せてパタパタと羽ばたきながら伊達のほうへ向かってきた

「一夏、あれ…」

「ああ、あれが言ってた例のロボットだな…」

「やっぱりカワイー／＼」

そして羽を上下させたまま空中で制止させる

『伊達君、今お時間は大丈夫ですか？』パタパタ

「うおっ！しゃべった！」

『何かありましたか？』

「何でもないよ、何か用？もしかしてデート？」

その瞬間食堂中からガタツとイスを鳴らす音が聞こえたのは気のせいだろうか

『馬鹿な事を言ってる暇はありません』

「う、ドクターまで俺を馬鹿にして…」

『お見せしたいものがありますので至急準備室まで来ていただけますか』

その言葉を聞いた伊達の顔つきが急に変わったのはきつと気のせいではないはずだ

「わかった、すぐ行くわ」ガタツ

立ち上がり白衣を整えた伊達は薰子達の方を向き

「悪いな、今日はこれまでってことで！」

「はい！ありがとうございます」

「デユノアちゃんも織斑ちゃんもせっかくのメシだったのに忙しくて悪いな」

「いえ、お構いなく（むしろこれからの方が…）」ニコニコ

「またいつでも誘いますよ」フンス

「そうか、じゃあまたな」

手を揚げ伊達と一夏達は別れ、伊達は足早に去って行った

「行っちゃったな…」

「お昼のときも思ったけど、なんか台風みたいな人だね」

「それは言ってるかもな、ハハハ」

「あ、写真撮り損ねちゃった」ガックシ

こうして食堂での一幕は幕を閉じて行った

そして伊達は真木に呼ばれ準備室へ…

「御呼び立てして申し訳ありませんでした」

「いや、別に構わないよ、ここならタバコ吸え、あ、捨てられたんだった…」

「本来なら控えていただきたいのですが…、まあいいでしょう、御呼びしたのは他でもありません」

「これを君にお渡ししておきます」ドン

そういつて真木が取り出したのは一つのアタッシユケース、部屋に残っていたのをそのまま使ったようだ

「これは？」

「バースシステムを元通り作成するのは現状不可能ですので、代わりの物を用意しておきました」

「代わりつて…、そんな簡単にできるもんなの？」

「できたからここにあるんです、とはいえだいぶ勝手が変わっていきますがね」

「そうかい」

「この世界について調べているうちに面白い物を発見しましてね、それを少し応用したものののですが」

「あ、小難しい話はいいわ、とにかくこれね。俺が持っていていいの？」

「ええ、しばらくの間はこれを使っていたいただきますので、今からでも試験装着を始めていきたいのです」

（なるほど、今日は中々寝れそうにねえな…）

タバコの吸えない寂しい口元を突っぱねさせ独りごちる伊達

その手で受け取ったカバンの留め具を外しカバンを開ける

（ “しばらく” とはいえ、こいつが俺の新しい相棒か… ）

紙を丸めた詰め物の間に収まったベルトバックル

今まで使ってきたものと同じようだがどこか違う、言葉に出来ない何かを伊達は感じ取っていた

緑に眩くベルトの光がやさしく伊達を包みこむ

（ やつぱりこの世界でも戦わなきゃ駄目なんだよな ）

（ のんびり教師生活って訳にもいかねえか… ）

久々に触ったベルト、伊達はまだ知らない

そのベルトの脇に刻まれた文字

” B I R T H I S ”

の七文字を…

所変わってここは学生寮

「はあく、メシも食べたし、明日は模擬戦だからな！早いところ寝るか！」

シャルロットと別れ寮室へ向かう一夏、薫子は知らない間に消えていた

どうせまた部活で頑張ってるんだろうな、等と考えながら歩を進める  
曲がり角に差し掛かった時のことである

「あ、千冬姉」

「織斑先生、だ」バシン

「痛、す、すいません」さすりさすり  
「けど何でこんなところにいるんだよ」

「いや、偶々だ」

「ふうん、あ、そうだ、あの後伊達先生凹んでたんだぜ」

「年下の女性に馬鹿って言われた」なんて言っただけ  
「けど楽しかったなあ」

「そうか、実はあの時は昼の一件で山田先生を庇ってもらった礼を  
言いにいくと思って行ったんだが」

「ああも堂々と喫煙をされるとさすがにああいうしかなかったから  
な」

「へへ、そうなんだ。千冬姉らしいね」

「けど山田先生さつき自分で行ってたよ」

「そうなのか！？…で、だ」

「何？」

「その、なんだ、やはり男が居れば違うか？いろいろと」

「うん、そうだなあ、シャルが来た時よりも何かずっと開放的になれてる気がするよ」

「伊達先生、男らしいし話が面白いし…」

「そ、そうか…」

「うん、俺もあんな兄さんが欲しかったな」キツパリ

ガ  
ン

「そうか、そうなのか…」

「うん、勉強とか教えてくれそうだし」

さつきから千冬は俯きっぱなしだ

「夏にはその理由が分からない」

「じゃあ、俺もう寝るよ、明日模擬戦だし」

「ああ」

「じゃ、おやすみ」

「ああ」

そのまま吸い込まれるように部屋へ入っていく一夏

一人残った千冬は…

「確かに私は親代わりだったが“兄”になってやることは到底無理な話だ…」

「そうだ、きつと物珍しいからあんなことを言ってるんだ、そうに  
違いない」

一人で勝手に決め込んで千冬は自室へ戻っていつてしまった

その頃・・・

昼に真木に一方的に突っかかってきたキーラは取り巻きと別れ新聞  
室の研究室内の自分のデスクに座る

さっきの真木や伊達とのやり取りからイライラしっぱなしであった

「クソが！男の癖に生意気な口利きやがって！今までのやつみたい  
に扱き下ろして使い捨ての下僕にしてやるうかと思っただが、それだ  
けじゃ腹の虫が治まらねえ」

おもむろに机の上のノートパソコンを起動させ機体データの画面を  
開く

そこには明日の模擬戦で教師側が使うISの一つであるラファール、そして簪から預かった打鉄式式の二機が移っていた

「そうだ・・・、これをこうすれば、クク、テメエの人生ゲームオーバー・・・ってな」

暗い室内でパソコンの光に照らされキーラの顔が邪悪に歪む

そして…

様々な人間の思惑や感情を巻き込み、舞台は翌日、模擬戦の時間へその場に居合わせた者は皆、後の世に刻まれるであろう、“伝説”を目撃することになる…

## インタビューと煙草と新たな力（後書き）

解説コーナー　今回は主人公伊達明！

おでん大好きで究極のマイペース男、しかしその眼光は誰よりも鋭くそして優しい

そんな頼れる兄貴ぶりを描いていけたらいいなと思います

あと、今回の千冬とのやりとりも前から書いてみたいと思っていたものです

力関係はこんなものだとということで（笑）

煙草についてですが、個人的に似合いそうなので吸わせてます

ベルトは、またいつかの投稿で補足しておきます、ではまた次回

「次回はいよいよ俺が…え？そこから先は秘密？つまんねえなあ」

**事件と拳と新たな変身（前書き）**

お久しぶりです…

長い間空けてしまつて申し訳ございませんでした

早速始めていきます

## 事件と拳と新たな変身

まただ、またあの夢の世界に墮とされた

一面真っ白の世界

雪のように眩しく真綿の様に優しく、そして光の様に温かい

《またこの夢か…》

伊達は一人この三度の夢の世界を訪れていた

《起きてても疲れ、寝ても訳わからん夢を見せられて》

《まだ慣れきってねえのか、俺は…》

その場に座り込んでボーっとしていると予想通りの

“アレ”が聞こえてきた

コツ…コツ…コツ…

彼方から聞こえる足音、昨日と全く同じである

《来ると思ったぜ、さあ、今日こそその面拝んでやるぜ》

足音の主は自分の方に近づいてきている

立ち上がった伊達もその人物に向かい歩を進める

ぼんやりと映るその姿はまっすぐに自分を見据え…

そしてその眼に赤い光を灯し…

伊達さん…、寝てる場合じゃないですよ

「うおおお〜、シャベッタアア〜」ガバツ

驚きのあまり飛び起きてしまった

だが飛び起きたその場所は…

「オッホン、伊達先生、会議中に居眠りして大騒かくなんて、さぞかし良い夢を見た様ですね」「ピクピク

中年の女性教師が額に青筋を浮かべながら震えていた

「いやあ、アハハ…」ちら

気まずく笑いながら真木の方を見る

立场上真木は伊達より地位が上であり座っている席も上に近い所にある

伊達は隅っこで机も使い込まれた物が宛がわれていた

「……………」ぷいっ

(くそ、目そらしやがった)

ちなみに真耶は相変わらずオロオロしており千冬は顔を伏せて必死に笑いをこらえていた

「すみませんでした…」ペコリ

ここはひとつ穩便に謝って済まし会議は再開した

とはいってもほぼ会議も終わりにさしかかっており、ほとんど聞くようなこともなかったのだが…

伊達は会議が終了するまで縮こまったまま過ごす羽目になってしまった

「ああ、ひでえ目にあった…」コキコキ

首を鳴らしながら職員室を後にする伊達

「あんな大声出してたら当たり前ですよ／＼」クスクス  
肩を並べ歩く真耶は笑みを浮かべながら応える

「けど何が喋ってたんですか？夢の中」

「いや、俺にもよく分かんねえんだけど、とにかくびっくりしたんだ」

「そう…なんですか」

「あ、もうこんな時間か、俺今日早番だからそろそろ保健室行くわ」

「はい、頑張ってくださいね。…それと」

「？」

「昨日はありがとうございました、お礼も碌に言えなくて…」

何事かと目を見開いた伊達だったがすぐに顔を綻ばせ

「いいっていいって、俺が勝手にやったことなんだから」

「はい、それじゃ失礼します」

そのまま角を曲がり別の方向へ行ってしまった

「山ちゃん先生ね、若いのに生真面目で今時珍しいな。な、お前も

そう思うだろ？」

「ウホッ　ウホッ」クルクル

「後藤ちゃんより真面目かもな、後藤ちゃんなんだかんだで笑いを優先する所あつたし」

などと零しながらたつた数日会ってないだけなのにもう何か月も会ってないように思える弟子や仲間思いを馳せる

「おっと、仕事が始まっちゃう」

そのまま速足で保健室まで向かう伊達、模擬戦を交えた特別な一日が始まる

そして時間は経ち…

朝から戦い続けた教師陣対専用機持ち達の戦いも佳境を迎えインパクトを挟んで

いよいよトリを務める簪の番が近づく

カタパルトデッキで待機中の簪は、本音と一緒にメンテナンスチェックに当たっていた

「いよいよだね、かんちゃん！ガンバガンバ！」

「おしゃべりはいいいから…手を動かして」

「むう、相変わらず厳しいなあ」

「ふう、疲れた、やっぱり山田先生強いな」

そうこうしている間に自分の前に戦っていた一夏が戻ってきた

「おりむーお帰り」

「オウ、簪にのほんさんが、いやー、手強かったぜ山田先生」

モニターはさっきの戦いはハイライトを映している

真耶もさすが元代表候補生だけあって、量産機でも一夏の白式と互角の戦いをしていた

「そうだ、すぐに機体をドックに持って行くんだったな、なんか今回面倒なこと多いな」

いつもとルールが変わっていることに慣れず不満を漏らす一夏

「それはそうと簪、機体大丈夫か？調整手抜きされてたりしてないか？」

「うん…多分、ていうか渡す前からちゃんとしてたからそこは大丈夫」

そうか、と手を振ってその場を後にする一夏

「さてと、私も頑張らなきゃ」

『次の模擬戦に出場の選手は入場の準備を始めてください』ザザ  
スピーカーから流れてくる案内の声に従いカタパルトに乗る

「かんちゃん、がんばってね〜」

「うんっ」

いつもよりも弾みをつけた返事を本音に返し簪はアリーナに飛び立つ  
いくつかある管制室の一つ、今この部屋には千冬、真木、キーラの  
取り巻きの一人がいた、先ほどまで真耶もいたのだが一夏との模擬  
戦のため部屋を後にしており今はいない

真木はさっきまで試合を見ながらひっきりなしに立体映像パネルを  
操作していたが、一夏と真耶の模擬戦が終わり簪の戦いがはじまっ  
たところだった

真木は手を休め機の脇に置いたタップをチラリと見ながら軽く溜め  
息をつく

「伊達明特製のおでん！今日のは会心の出来だよ！〜」

等と言いながら満面の笑みで管制室まで平気な顔で入ってきた

そして置いていったのがタップに詰め込んだおでんだった

「腹空かしてると思って差し入れ持ってきたぜ〜」

相変わらず空気を読まない男である

「お疲れ様です〜、ふ〜、織斑君強かったです〜」

「お疲れ、山田先生。なかなかだったな」

ISスーツの上にジャージの上着を羽織った真耶が管制室に戻って  
くる

千冬も真耶に労いの言葉をかける

「はう〜、お腹すきました。ん？何かいい匂いがします〜」クンクン

真耶は匂いをさぐってその正体を探す

見兼ねた真木はその正体であるおでんの入ったタツパを差し出す

「先ほど伊達君がこちらを訪ねましてね、山田先生に差し入れを作  
ってきたそうです」

「ええっ、私にですか？ うれしいですう〜」パアア

それを見ていた千冬は顔を伏せプツと笑いを堪えていた

「わ〜い、いただきま〜す」パクリ

「おいしいれすう〜」モグモグ

カツオ出汁のいい匂いを充満する管制室の中でモニターが小さな異  
変を写したのはその時である

所変わってこちらは観客席、東出口入口席

仕事をあがって辺りをフラフラしていた伊達は真木に差し入れを届けた後アリーナを訪れていた

今は簪と対戦相手が入場してきて賑わっている

先ほどの一夏の戦いのハイライトに食い入るように見ていた

戦いではなく兵器としてのISの在り方についてを

「すげえな…ISって」

「こんなもんがありや女性優遇なんてものがあって当たり前だな」

「風は常に強者に吹いている…か」

「あ、伊達先生だ！」

「伊達先生何してるの？こんなところで」

「いや、まあちょっとな、見学だ」

そう言いながらちょっと離れたところでミルク缶に座り込みもう一つのタツパを取り出しおでんを食べだす

「やっぱ昆布出汁だよな」モグモグ

その時である、賑わいとは違ったざわめきを伊達が耳にしたのは

そしてこちらも観客席、東出口最前列席

「一夏君、簪ちゃんの出番よ！ちゃんと見なさいよ」

「わかってますって楯無さん、そんなにひつつかなくても！」

楯無はわざわざ一年生用の観客席まできて一夏の隣に座り込んでいたのだ

「会長！二年生はあっちに席があるじゃないですか！」

「そうですね！あんまり騒がれては観戦の邪魔になります」

見兼ねた箒とセシリアが抗議するが楯無は意にも介さない

「あつ、簪ちゃんよ！キヤー簪ちゃん」ブンブン

まるでアイドルに遭遇したように騒ぎだす楯無

「けど対戦相手のスペックデータ…あれって第一世代の武装だよね？」

「確かに、打ち話など現物で見るのは初めてだ」

「実戦で使おうとする人初めて見たよ」

熱くなっている箒達をよそに冷静に対戦相手を観察しているシャルロットとラウラ

熱烈に応援していた楯無も対戦相手を見て表情を変える

（あの対戦相手…新開室のキーラ博士の腰巾着よね…）

(何もないといいけど…)

対戦相手のISはラファール・リヴァイヴ

先述のとおり右手にスプリング式の銚を圧縮して射出するアームカ  
バーを装備し肘から肩にかけて正体のよく分からないチカチカ光る  
突起物が出ている

ヘッドマウント型のゴーグルをかけておりその表情はうかがいしれ  
ない

そしていよいよ試合開始にブザーが鳴り響く

簪は様子見として背中の春雷を敵機に向け放つ

相手は高速機動で回避すると左手に装備した短機関銃を撃つが

それを見越した簪は前に飛んでリーチの長い夢現を横に振るう

左肩にクリーンヒットし相手は大きく体制を崩しよろける

着地した簪はチャンスとばかりに再び斬りかかるため振りかぶる

着かず離れずで相手の手を回避しながら攻撃していく簪

一見すると一方的な試合だが当の簪は不安な表情を浮かべていた

(機体が重い…？ 否、チェックは完ぺきだったはず)

その懸念は観客席にいた楯無達も感じていた

「ねえ一夏君、なんか簪ちゃんの動き、変じゃない？」

「確かに動きがなんか固い…というか一方的に押ししてるからそんなに目立ってないけど各対応がどことなく遅れてますね」

「それに…相手の動きもどこか変だぞ、右手を庇うようにして…」

「箒もどこか異変に気付いたようだ」

そんな三人の不安をよ所に会場は盛り上がる

観戦していた誰もが次の一撃を加えるのに成功すると予想していた、しかしその期待は裏切られる形になる

こちらは管制室

「何なんだ？あのしょっぱい戦いは？」

「対戦相手もそうですけど更識さんも動きが…、どう見ても変ですよね」

千冬とおでんを食べ終えた真耶がモニターを見つめながら呟く

「確か更識の機体の整備は………」

「はい、確か新開室が請け負ったと聞いています………」

「」「」

二人は顔を見合わせた後、新開室の籍だけの所長である真木の方を向く

「……………」

そんな二人にお構いなしと言わんばかりに真木は映像が移り変わる観客席のモニターに目を配っていた

傍に鎮座した人形に見守られながら…

こちらは先ほど伊達がおでんを食べていた東出口の入口側席

「ああっ、惜しい。いいところだったのに！」

「敵の動きがだんだん良くなってきているの？」

「それもあるけど…、更識さんの動きがさっきよりダンチで悪くなってる？」

「何々？何かトラブツたの？」

ざわついている女子達に伊達が口を挟む

「あ、伊達先生、戦ってる更識さんの機体が…」

「？」

そしてこちらは東出口最前列席

「やっぱりおかしいわ、パネルのスペックデータのダメージゲージ

は全然減ってないのに！」

「ちょっと待って、相手の様子がおかしいぜ!？」

先ほどまで防戦一方だった敵機が反撃に移る

目に見えて動きが悪くなっていた簪の打鉄式式の肩を鷲掴みにし短機関銃で射撃に入る

「くっ、こんなのッ！」

スラスターを噴射し上に回避に入るがここで信じられない事態が起きた

一度点火したブースターが突如何もなかったかのように止まってしまったのだ

一瞬浮かび上がってまたすぐ地面に倒れこむ

その隙を逃さず相手は簪に銃弾を遠慮なく撃ち込む

「ああッ、くうッ」

簪の式式は量産型の打鉄に比べ機動性に富んでいるがその反面防御に難がある

謎の不調によりアドバンテージを崩された簪は為すすべもなく敵の攻撃を受ける

「……………」

ゴーグルで目を隠した相手はいつもの口汚さとは打って変わって一言もしゃべらずただ無表情に銃を撃ちはなってくる

カキン

一度弾切れを起こしマガジンを取り換える敵機・ラファール

その隙を狙い簷は夢現を横に薙ぐ

が、ここでまたしても右手に正体不明の障害が働きガシャンと音をたて腕を地面に垂らす

(駄目、何で？機体が…、お願い動いて…)

仕方なく脚部のブースターで相手との距離を取り持ち直す

だがそれに対し相手は捕縛用のアンカーを打ちだし式式の脚部に巻きつけ自分の領域に引き戻す

機体を思うように動かせない簷はなすすべもなく攻撃を受け続けた  
ちまち機体のダメージレベルがCになってしまった

管制室にも緊迫した空気が走る

「おい、聞こえているのか！試合はもう終わっている！武器を仕舞え！」

千冬がマイクを通じて敵機に呼びかけるが敵は聞く耳を持たず攻撃を止める素振りを見せない

「大変です！このままじゃ更識さんの機体が…」

「おい貴様！いったい何を企んでいるんだ！今すぐ辞めさせる！」

千冬はすごい剣幕で管制室にいたキーラの取り巻きの胸倉をつかみ詰め寄る

「……………ヒヒ」

どこか照準の合わない目を右往左往させながら取り巻きは口から薄気味悪い笑みを零すだけだった

こんな状況でも真木は観客席を映したモニターを凝視していた

真木が見ていたのは二点、観客席で一人ノートパソコンをいじった後、北出口から観客席を後にしたキーラと状況をよくわかっていない伊達だった

そして人形をつかみ上げおもむろに立ち上がると管制室を後にするそれに誰も気づくものはいなかった

場面は変わって東出口入口席、伊達がいる所だ

「大変、このままじゃ更識さんが！」

「機体のダメージがレベルDになっちゃう」

（何だか大変なことになってるみたいだな…）

「君たちには“とある世界”を救ってきてほしいんだ」

ふとフラツシユバックする鳴滝の言葉

「まさか鳴滝のおっさん言ってた意味って…」

「伊達君」

「ドクター！やっぱりこれって…」

「私にはわかりませんが、現状この学園で打つ手はないようですね」

「だよな、ってことはこれがこの世界の敵ってやつか？」

「いえ、おそらくその予想はずれてい」

「とにかく俺、行くわ」ガシャン

ミルク缶を背負い最前列席の方へ向かおうとする伊達だがその腕を真木がつかむ

「そう言うだろうと思っていました、ということは何れを使つつもりでは？」

「当たり前だろ、今やなくなっていくやるんだよ」

「昨夜渡したそれは未だ未完成だと言ったでしょう、実戦投入は危険です」

「どういう意味だ？俺のこと心配してんのか？」

「何を馬鹿な、バースは数少ないこちらの切り札です。実験を重ね安定した稼働ができるまでそう安易に見せるべきではないと言っているのです」

「そんな事言ったらいつまでたっても変わらねえだろ、あの子はどうするんだ！」

伊達は今なお敵の無慈悲な洗礼を浴びている簪の方を指差し語気を強める

「それにあの子が戦ってる相手って、あなたの所にいる研究員なんだろ？」

「明らかに様子がおかしいだろ！ほったらかしにしてたらどうなると思ってるんだよ！」

食ってかからん勢いで真木に詰め寄る伊達、それを真木は…

「さあ？何とも」

「なっ…」

「よもや君は私が生き返ったことで改心したただの更生したただの都合のいい妄想をしていたんじゃないですか」

「馬鹿な事を」

「そうかよ…」

「姉の命まで奪ってまで私が着手した世界の終末をやすやすと手放

すとても?」

「もついいよ…」

「少なくとも私には私なりのやり方がありますが、一々君に足並み揃えていられるほど私もヒマではないのです」

「いいって…」

「まあ気の毒ですが更識君にとってもこれが一つの終末、一つの完成だった…ということだ」

「いいって言ってんだろッ!」

バキィッ!

真木の左頬を伊達の拳がヒツトする

そのまま宙を舞い地面に叩きつけられる真木

「あ、ああ、ひいいいいいああ。伊達君、いったい何を…」

転げ落ちた人形を慌てて拾いなおし反論する

「伊達先生、何やってるんですか!」

「こんな時にケンカしちゃだめですよ!」

「真木先生…痛そ〜」

そばにいた女子達が仲裁に入るが伊達はそれを気にも留めず詰め寄る

「ドクター、今回ばかりは頭に來たぞ、グチグチグチグチ陰気臭エことばっか言いやがって！」

「しかし、このままではどうせ見苦しい結果を晒すだけでしょう」

「それがどうしたよ、みつともなかるうが情けなかるうが俺はやるぜ」

「もう目の前で諦めるのは真っ平だからな」

「あんたも終わりだどーだなんて言うなら、もっとスッキリした綺麗な終わり方ってやつを見せてみるよ」

何度も戦場を潜ってきた伊達の瞳はどこまでも熱く真っすぐだ

赤くなつた頬を擦りながら立ち上がり真木は踵を返し観客席を後にする

「勝手にどうぞ」

それだけ言つて完全に姿を消してしまつた

「つしやあ、やるか！」

「悪いな、見苦しいとこ見せちまつて」

とだけいつて最前列に向かう、今できることをするために…

そしてこちらは最前列席…

「クソッ、どうなってるんだよ！このままじゃ簪が…」

固く握った拳でバリアを叩く一夏

「ねえ、あなたたち機体を持つてる人はいないの!？」

「すみません…、もうドックに預けてしまつてて…それにどのみち白式じゃないとバリアは…」

筭たちに震える声で問いかける楯無だが、今回のルールで模擬戦が終わった後機体を整備に回すことになっている為ここにはない

力なく頂垂れる楯無

(ハメられた…、連中ははじめからこれが狙いだつたの?だから簪ちゃんの機体の整備を…)

(甘かつたわ…、だれか、誰でもいいから簪ちゃんを助けて!)

声にならない叫びを上げる楯無、生徒会長であり対暗部用構成員でもある彼女も一人の少女であり、一人の姉だ

その時である

「ちょっと離れてろ!」バギユン バギユン

黒と緑の大型の銃を構えた伊達が駆け付けた

放たれた黄色に光る光弾はバリアに当たると表面を水面のように揺らし霧のように消えてなくなった

「くっそ、やっぱりバスターじゃバリアは破れねえか…」

「伊達先生！なんでここに？ていうかそれなんですか？」

「詳しい話は後だ、どっかにバリアあけるドアノブないか？」

「あるわけないじゃないですか！そんなもん」

「じゃあ、カギ穴とか！」

顔は真剣だが冗談を言い続ける伊達を楯無が睨む

「いい加減にしてよ！このままじゃ簪ちゃんが死んじゃうでしょ」

「ふざけに来たんなら帰ってよ！！」

目尻に涙を溜めた楯無が伊達に掴みかかる

一夏や箒は普段見せない楯無の表情に言葉を出せないでいた

「分かった、分かったよ」

「目の前で傷つけられてる命を前にして、何もせずにいられないのは俺も同じだ」

バリア越しに敵機に踏みつけられてる簪と式式を見つめる伊達

「とはいえバリアだな…。どうするか…そつだ！」

伊達は先ほど光弾が当たったバリアが揺れたことを思い出した

「一か八かだ、超音波でちょいっと弄れば…」プシュ

ミルク缶からプテラカンドロイドを取り出しプルタブを開け真上に  
放り投げる

「プテラッ」ギューーン

一夏達の真上を旋回し伊達の顔の近くでホバリングするカンドロイド

「よし、ちょっと皆耳ふさいでくれ」

キーン

「へ、いったい何が…ウツ」

「な、何だ？この音は…」

耳を劈く怪音に一夏達は耳を押さえて蹲る

そして超音波を浴び続けたバリアは幾つもの波紋を生み出し揺らぐ

「よしっ、今度こそ！」バギューン

ピシッ バリーン

揺らぎにぶつけた光弾によりバリアは音をたてて穴をあけた

「よっしゃー！空いた」

「けどどうするんですの？私たちは今だれもISを持っていません  
わ」

「そつだよ！このまま生身じゃ行けないよ！」

セシリアとシャルロットの言うことももつともだ

そこに伊達は頼もしく言い放つ

「いいっていいって、あとは俺に任せときなベイビー」

ミルク缶からもう一つの道具、バースドライバーを取り出し上手く操って腰に巻きつける

「先生、それって…」

弾いたメダルを左手で受け取るとそれをベルトのバースロットに挿入する

するとセルリアクターの前に緑の目盛りのようなものが現れさらに右手でグランプアクセラレーターを回転させる。二回ほど回転させると…

「変身」

カポーン

小気味の言い音と共に伊達の体が眩い光に包まれる

光がおさまるとそこにいたのは…



「そうかい、そいつあくご苦労だねえ」

「ご苦労ついでにこのくだらないイタズラをもうやめていただきたいのですが」

「残念だねえ、真木所長。あんた二つ勘違いしてるわ」

「まず一つ、やめるつもりなんてさらさら無いんだよ、そしてもう一つ」

「これはくだらないイタズラなんかじゃなくて立派な計画なんだ」

「計画？」

「そう、新任の男性教師、まああんたのことだわ。そいつが行き過ぎた改造で生徒を一人殺してしまいましたとさ」

「そしてそれに付き合わされた薄幸の女科学者、これがあたしね。」

怒った女科学者の親族はこんな職場にあたしを預けることができないって怒る」

「そうすれば私は晴れてシャバの空気が吸える。どう？素敵だと思わないか」

「立案にはさぞかし知恵を絞ったようですが…、致命的な欠点の一つありますねえ」

「私に罪を着せようとするなら、私はその追及を全力で忌避するでしょう」

真木の反論にキーラは目を丸くさせる、だがその顔を破顔させ

「そうねえ、じゃあこんなのはどう？狂気の男性教師、生徒を死なせて発狂して拳銃自殺、なぐんてのはッ！」  
「パァン」

喋りながらキーラが取り出したのは黒く光るハンドガン、放たれた一発の弾丸は真木のコートを掠め地面に穴を空ける

辺りに煙の臭いが立ち込める

その時

「ど、どういうことなんですか？」 カラーン

シヨックのあまりメンテナンススチック用のシートを挟んだバインダーを地面に落したまま拾おうとしない少女、布仏本音が立ちすくんでいる

「かんちゃんが生贄って…、それに真木せんせーが自殺って」

足を震わせながら言葉をつなぐ本音

「布仏君…ここから離れていなさい」

真木が本音に告げ終えたその刹那

「あーあ、発狂した男性教師の可哀そうな被害者が一人増えちゃったな」

抑揚の少ない声で拳銃を本音に向けるキーラ

緊張が走る、この観覧席でもう一つの戦いが始まる

## 事件と拳と新たな変身（後書き）

解説のコーナーです

伊達さんの新たな力【BIRTH IS】についての紹介です

ベルトを一から作り出すのは現時点では不可能だと悟ったドクターはセルメダルの特性を見直し新しく作り直したわけです

主な違い

以前のバースはCLOWSという体外的な能力のためにメダルを消費しましたが、BIRTH ISはそれを逆手にとり装着者の内部に効果を及ぼす仕掛けになっています。

言わばメダルのエネルギーを全身に循環させているわけです

しかし現段階では未完成な部分も多く、メット部分がないのもそのせいです。

そしてメダルをベルトの中で所謂“焼けつき”を防ぐために変身継続時間を強制的に90秒でカットするシステムを備えています。

先述のとおりエネルギーを内部に向けているため、これまでのCLOWSは装備できません

ちなみにBIRTH ISのISはInternal structure（内部構造）の略です

Immediate steps（緊急処置）の意味も含まれていません。インフィニット・ストラトスではありません

詳しくは展開によって解説を増やしていきます

それではまた次回

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3278v/>

---

伊達「IS学園？」 一夏「仮面ライダー？」

2011年11月16日15時05分発行